

平安京左京二条二坊十・十五町
(高陽院) 跡発掘調査報告書

2 0 1 9

株式会社 文化財サービス

例 言

1. 本書は京都市中京区油小路通丸太町下る大文字町50他で実施した、平安京左京二条二坊十・十五町跡、二条城北遺跡、高陽院跡の発掘調査報告書である。(京都市番号17H642)
2. 調査は当地の土地開発に伴い、株式会社新和不動産、株式会社TAKARAより株式会社文化財サービス(以下、文化財サービス)に委託され実施した。調査は、辻 純一、辰巳陽一、望月麻佑が担当した。
3. 調査期間は、平成30年7月2日～10月31日である。
4. 調査面積は、594㎡である。
5. 本文・図中の方位・座標は世界測地系 平面直角座標系VI(ただし、単位(m)を省略した)による。標高は、T.P.(東京湾平均海水面高度)である。
6. 土層及び出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
7. 本書は、文化財サービスの社員にて作成した。執筆は辻、辰巳、望月が担当した。編集は辻、辰巳、望月、田邊貴教、野地ますみが担当した。
8. 写真は、文化財サービスの社員が撮影した。発掘調査の遺跡撮影は主に辰巳が担当し、望月が補助した。出土遺物の撮影は西 絢香が担当した。
9. 調査に係る資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
10. 発掘調査及び整理作業の参加者は以下の通りである。
(発掘調査) 大西晃靖、塩地宏之、田中慎一、小林一浩、上田智也、吉岡創平
(整理作業) 米倉美穂、吉川絵里、多賀摩耶、植村明男、中野キヌヨ、古谷眞由美、
甲田春奈、内牧明彦、大谷 弘、本間愛子、溝川珠樹(以上、文化財サービス)
11. 調査期間中は、株式会社新和不動産並びに株式会社TAKARAに全面的なご協力を賜った。
12. 発掘調査・整理作業においては、平安京条坊データの提供や既往調査の資料閲覧等、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所及び國下多美樹(龍谷大学)、山田邦和(同志社女子大学)の両氏(調査の検証委員)より多大な協力をいただいた。また、下記の方には調査資料の提供や遺構・遺物についての様々なご教示をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略)
西山良平(京都大学)、鈴木久男(京都産業大学)、吉崎 伸(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)、南 孝雄(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)、平尾政幸

目次

第Ⅰ章 調査の経緯	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査経過	2
第Ⅱ章 高陽院の歴史	4
第Ⅲ章 周辺遺跡と既往調査	6
第Ⅳ章 調査	
(1) 基本層序	9
(2) 遺構	9
1. 1区の遺構	12
2. 2区の遺構	14
3. 3区の遺構	17
第Ⅴ章 遺物	
1. 土器類	22
2. 瓦類	26
第Ⅵ章 まとめ	
1. 池底の構築法	31
2. 池埋土について	32
3. 池汀部と池底標高値の問題	33
4. 埋戻土について	35
5. 油小路について	37

図版目次

図版1	遺構	第1面平面図 (1:150)
図版2	遺構	第2面平面図 (1:150)
図版3	遺構	第3面平面図 (1:150)
図版4	遺構	第4面平面図 (1:150)
図版5	遺構	1. 1区第1面調査区全景 (東から)
図版6	遺構	1. 1区第1面路面1検出状況 (南から) 2. 1区第2面井戸0082検出状況 (南東から)

図版 7	遺構	1.	1区第2面調査区全景（東から）
図版 8	遺構	1.	1区第3面調査区全景（東から）
図版 9	遺構	1.	1区第4面（池底）調査区全景（東から）
図版 10	遺構	1.	2区第1面調査区全景（東から）
		2.	2区第1面土坑0231遺物出土状況（西から）
図版 11	遺構	1.	2区第1面路面1検出状況（東から）
		2.	2区第2面調査区全景（東から）
図版 12	遺構	1.	2区第3面調査区全景（東から）
		2.	2区第4面（池底）調査区全景（東から）
図版 13	遺構	1.	3区第1面調査区全景（西から）
		2.	3区第1面溝0383（東から）
図版 14	遺構	1.	3区第2面調査区全景（西から）
		2.	3区第3面調査区全景（西から）
図版 15	遺構	1.	3区第4面（池底）調査区全景（西から）
図版 16	遺物	1.	出土緑釉瓦
		2.	柱穴0111出土軒瓦
図版 17	遺物	1.	溝0383出土遺物
		2.	溝0383出土猿面硯
		3.	4層出土石包丁

挿図目次

図 1	調査地位置図（1：2500）	1
図 2	調査経過写真	3
図 3	高陽院既往調査位置図（1：2000）	6
図 4	各調査区割図（1：300）	9
図 5	調査区北壁断面図（1：80）	10
図 6	調査区西壁断面図（1：80）	11
図 7	調査区と条坊位置図（1：350）	12
図 8	1区柵列2平面・見通図（1：60）	13
図 9	1区井戸0082平面・断面図（1：40）	13
図 10	2区土坑0231平面・断面図（1：20）	15
図 11	2区建物3平面・見通図（1：50）	17
図 12	3区溝0383平面・断面図（1：80）	19
図 13	3区建物5平面・見通図（1：60）	20
図 14	3区柵列6平面・見通図（1：60）	20
図 15	遺物実測図 1（1：4）	23
図 16	遺物実測図 2（1：4）	24
図 17	遺物実測図 3（1：4）	26
図 18	遺物実測図 4（1：4）	28
図 19	遺物実測図 5（1：4）	29

図20	2区西壁断面写真(1:20)	32
図21	高陽院調査地周辺コンタ図(1:2000)	34

表目次

表1	高陽院略年表	5
表2	高陽院既往調査	7
表3	遺構概要表	9
表4	遺物概要表	22
表5	高陽院池関連の標高値データ	35
表6	遺物観察表	38

第 I 章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

京都市中京区油小路通丸太町下る大文字町内に、株式会社新和不動産・株式会社 TAKARA が建物建設を計画した。建設予定地は、平安京左京二条二坊十・十五町跡、二条城北遺跡、高陽院跡に該当する。高陽院は平安時代後期に藤原頼通が造営した、平安京左京二条二坊九・十・十五・十六町の二町四方の敷地を占める邸宅である。後鳥羽上皇の院御所となる鎌倉時代初頭（1205年）には敷地が十五・十六町の南北二町に狭められ、油小路が再設定されたと思われ、鎌倉時代初頭以降の油小路の検出も予想された。また、弥生時代の集落遺跡である二条城北遺跡の範囲内にも該当する。そのため、当地で以前に開発の計画がなされており、昭和61年6月に試掘調査が、京都市文化観光局（（当時）現 市民文化局）文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「市文化財保護課」とする。）の手で実施されている。

試掘調査は、建物建設予定敷地内に2箇所の調査区を設定し実施された。その結果、敷地西端付近で、時期は不明であるが小礫を強固に敲きしめた層や高陽院の時期と思われる池の堆積土等が確認されたことから、市文化財保護課より発掘調査を行うことの指導がなされた。しかしながら、その時の開発行為は中止となり、発掘調査は実施されなかった。

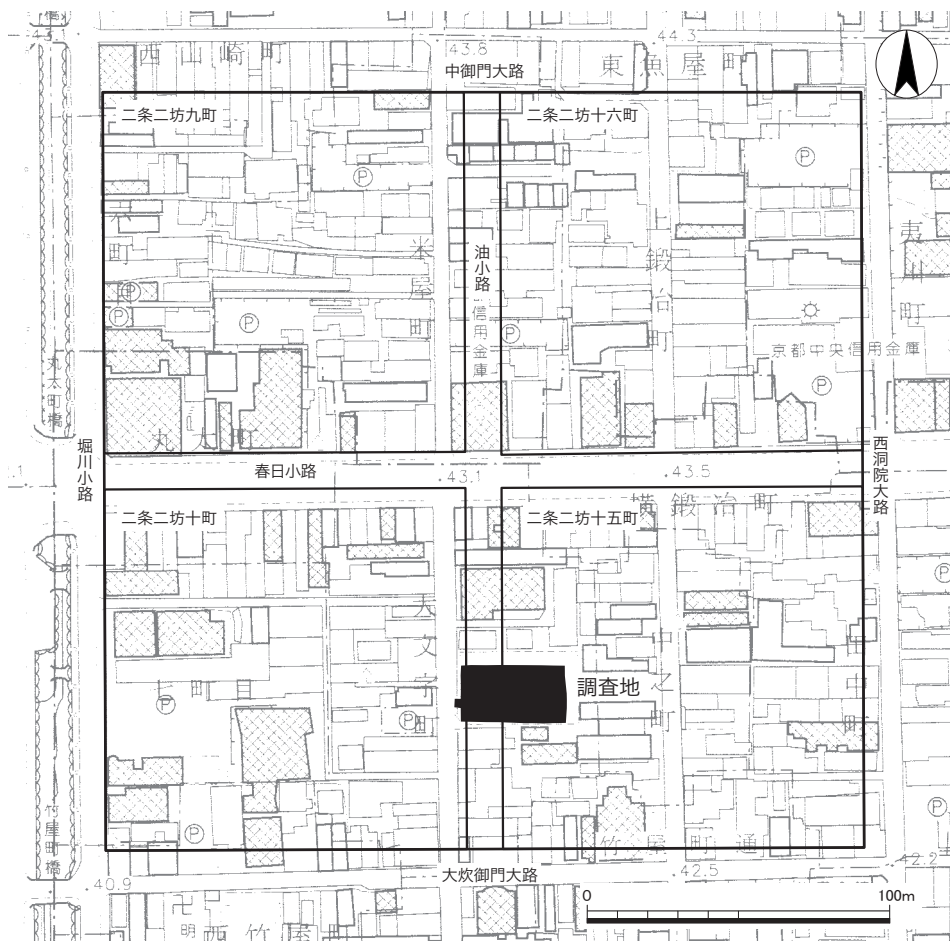


図1 調査地位置図 (1:2,500)

2 調査経過

今回の新たな開発行為に対して、市文化財保護課は試掘調査の成果を踏まえ、敷地の中央部に南北 18 m、東西 33 m の範囲で発掘調査を新たに指導し、実施されることになった。発掘調査は、株式会社新和不動産、株式会社 TAKARA から文化財サービスに委託され、平成 30 年 7 月 2 日より調査を実施した。

当該地は、試掘調査の結果や周辺の発掘調査成果から平安時代後期に藤原頼通によって造営された著名な邸宅である高陽院内の池跡に調査区全面が該当し、その池底までの掘削深度が現地表面から約 2.5m まで下がることが予測された。

前述の試掘調査をもとにした指導により発掘調査範囲は敷地中央に南北 18m、東西 33m の 594 m² である。その残土は約 1,500 m³ となることから残土置き場の確保のため、指導された調査範囲を 3 分割（1～3 区）して調査を進めることとした。1 区を調査区北半部、2 区を調査区南西部、3 区を調査区南東部とした。また、最終的に掘削深度が深くなることで、調査中に出る残土の運搬はベルトコンベアではあまりに急こう配となる危険性や騒音、土埃の飛散等を考慮し、残土は調査区内で屯袋に収めたものを重機により土置き場に積み上げることにした。

発掘調査は、近隣の方へ発掘調査の周知を行った後、1 区（南北 8 m、東西 33 m）の設定を行い市文化財保護課の承認を経て、平成 30 年 7 月 2 日より重機による表土掘削を開始した。試掘調査において敷地西部で確認された小礫を敷き詰めた層が地表下約 1 m にあることから、その上層である暗褐色砂泥層（2 層）までを重機掘削で掘下げ後、人力での調査に切り替え、攪乱の掘下げ及び第 1 面の遺構検出を開始した。

1 区の調査は基本的に 3 層上面、4 層上面、5 層上面及び地山の砂礫層上面で調査を行った。3 層上面では桃山時代～江戸時代、4 層上面では中世、5 層上面及び地山面では平安時代及びそれ以前の遺構の検出に努め、遺構の検出・掘下げ、記録類の作成及び写真撮影を行った。また、各面での遺構完掘時には市文化財保護課の臨検と今調査の外部検証委員に調査検証をお願いした。1 区調査中の平成 30 年 8 月 11 日には、地元の方を対象にした現地説明会・公開を行った。説明は午前・午後各 1 回行い、普及啓発に努めた。参加者は約 100 人であった。1 区の調査は平成 30 年 8 月 21 日に終了した。

2 区は平成 30 年 8 月 22 日より 1 区の埋戻しと並行して重機掘削を開始した。8 月 27 日より、第 1 面の遺構検出を開始し、1 区と同様に 3 層上面、4 層上面、5 層上面及び地山の砂礫層上面で調査を行った。各面で市保護課の臨検、検証委員の検証を受けながら調査を進め、平成 30 年 9 月 27 日に調査を終了した。

3 区は平成 30 年 9 月 28 日より 2 区の埋戻しと並行して重機掘削を開始した。10 月 2 日より、第 1 面の遺構検出を開始し、3 層上面、4 層上面、5 層上面及び地山の砂礫層上面で調査を行った。各面で市保護課の臨検、検証委員の検証を受けながら調査を進め 10 月 26 日に調査を終了し、埋戻しを行った。また、調査事務所やその付属物、機材等を撤去し、平成 30 年 10 月 31 日に事業主に引渡し、発掘調査を終了した。



1. 調査前 (北西から)



2. 重機掘削 (北東から)



3. 1区作業風景 (北西から)



4. 1区埋戻し (北東から)



5. 2区作業風景 (北西から)



6. 3区作業風景 (北東から)



7. 地元向け現地説明会風景 (北から)



8. 調査完了後 (北西から)

図2 調査経過写真

第Ⅱ章 高陽院の歴史

高陽院は、桓武天皇の第七子、賀陽新王の邸宅（中御門南、堀川東から平安京左京二条二坊九町）が始まりとされる。九町内での4次調査^{注1}で平安時代前期の苑池を確認している。

平安時代中期段階でも園地を伴う邸宅があったことが、発掘調査で明らかになっているが、誰の邸宅かは不明である。

その後11世紀に入り、藤原頼通がこの地を大いに気に入り、宅地を二町四方に拡大（平安京左京二条二坊九・十・十五・十六町）し、関白となった1019年より邸宅の造営（1次造営）を開始し、1021年に落慶した。1024年には後一条天皇の行幸を仰ぎ、競馬が催された。この様子が『駒競行幸絵巻』に描かれている。この絵巻には池で舟遊びをする光景も描かれている。

その後、長暦3年（1039年）、天喜2年（1054年）、承暦4年（1080年）、天永3年（1112年）に焼失したがその都度再建（2～5次造営）された。特に2次造営時には「高陽院殿修造の時」「宇治殿自ら御沙汰ありき」と『作庭記』にあり、頼通自らが景石の石立をする等精力的に造営に関わっている。里内裏として提供されることも多く、3次造営は里内裏としての再建で後冷泉天皇が入御、後冷泉天皇以後5代の天皇がここに居住し「累代の皇居」と呼ばれた。行幸と競馬が高陽院の2大イベントとするくらい多くの文献上の記事に見える。また、高陽院を院号とした鳥羽上皇の皇后、高陽院（藤原）泰子は久寿2年（1155年）12月に高陽院において生涯を終えている。

鎌倉時代に入ると後鳥羽上皇が院御所として院政の拠点とし、元久2年（1205年）に造営が行われ遷御している。この造営時に宅地規模が、従来の二町四方から南北二町（十五・十六町）規模に縮小されたようである^{注2}。また、この造営に伴って高陽院の宅地南西部に広がる池は埋められ、油小路が再設されたと思われる^{注3}。

後鳥羽上皇院御所としての高陽院は1205年の新造後、2回の改造（1209・1218年^{注4}）と小さな築垣の構築（1215年）がなされている。

承久の乱での敗北で、後鳥羽上皇は配流され、後高倉上皇が高陽院を用いたが、1223年1月の放火による焼亡で消滅^{注5}、以後、再建されることがなかった。

注1 平安京左京二条二坊・高陽院跡1 『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』

注2 「(天久二年)十二月二日、今日高陽院御移徒也、(中略)所々大略歴覽、南北二町、東西一町、屋敷六十余宇」『三中記』

注3 「(承久二年四月)十六日、此日東宮始聞魚味、(中略)今暁行啓院御所、高陽院、被遂行也、(中略)御路西洞院北行、二条西行、油小路北行、(中略)自高陽院西面四足門入御、」『玉葉』

注4 承元三年十二月十日、有高陽院御移徒也、(中略)今度非新造、引出寢殿於南、東対屋加庇、少々被造加舎屋也、十六日、高陽院殿屋百宇云々、『三長記』
建保六年十一月の廿一日、為高陽院修理鎮宅被修之、『門葉記』

注5 貞応二年正月十二日、高陽院有放火事、数字殿社一時焼亡、放火之有其聞、法皇御幸一条相国亭、『百鍊抄』

表1 高陽院略年表

	寛仁	3	1019	藤原道長出家 法成寺造営開始 頼通関白となる この頃、高陽院の造営始める？
1次	治安	1	1021	藤原頼通 賀陽親王旧邸二町を含む四町規模で高陽院造営
		2	1022	法成寺落慶供養
	万寿	1	1024	競馬 後一条・東宮(敦良) 太皇太后(彰子)ら列席
		2	1025	道長、法成寺阿弥陀堂にて崩御
		3	1026	高陽院水閣歌合
			1036	後朱雀天皇即位
	長暦	3	1039	高陽院焼失
2次		4	1040	高陽院再建
	長久	4	1043	後朱雀天皇遷幸(里内裏)
	寛徳	2	1045	後冷泉天皇即位
	永承	7	1052	藤原頼通 宇治殿を寺院に改める(平等院)
	天喜	1	1053	後冷泉天皇 冷泉院より遷幸 平等院阿弥陀堂(鳳凰堂)落慶
		2	1054	高陽院内裏焼失
3次	康平	2	1059	高陽院上棟
		3	1060	後冷泉天皇 三条第より新造の高陽院へ遷幸
		5	1062	後冷泉天皇 競馬・騎射を観覧
			1068	後三条天皇即位
	延久	1	1069	後三条天皇 大宮院より遷幸
			1072	白河天皇即位
	承保	1	1074	藤原頼通没
		2	1075	競馬 白河天皇行幸 法勝寺の造営を始める
	承暦	1	1077	白河天皇 六条宮より高陽院に移る 法勝寺落慶供養
		4	1080	高陽院焼失 白河天皇内裏へ移る
	応徳	3	1086	堀河天皇即位 白河上皇の院政始まる 藤原師実摂政 鳥羽離宮造営を始める
4次	寛治	3	1089	藤原師実 高陽院を再建
		6	1092	高陽院再建成る
	承德	1	1097	堀河天皇 新造高陽院清涼殿に遷幸
	康和	2	1100	堀河天皇 高陽院に遷幸
			1107	鳥羽天皇即位
	天永	2	1111	鳥羽天皇 土御門より高陽院へ遷幸
		3	1112	皇居高陽院が焼失
5次	久寿	2	1156	鳥羽上皇皇后 高陽院(藤原)泰子 高陽院で崩御
			1183	後鳥羽天皇即位
			1198	土御門天皇即位 後鳥羽上皇
6次	元久	2	1205	後鳥羽上皇 高陽院殿へ御移徙
	承元	1	1207	後鳥羽上皇 御所高陽院
		3	1209	高陽院大改修
		4	1210	高陽院の馬場殿が焼失 順徳天皇即位
	建暦	2	1212	後鳥羽上皇 御所高陽院
	建保	1	1213	順徳天皇 高陽院へ行幸
		2	1214	二条猪熊が焼亡 余炎が高陽院の東門や中門御車宿等におよぶ
		6	1218	高陽院修造
	承久	2	1220	皇太子が上皇御所高陽院で袴着
		3	1221	承久の乱 後鳥羽上皇・土御門上皇・順徳天皇配流 仲恭天皇即位(承久の乱前)、後堀河天皇即位
	貞応	1	1222	後高倉法皇が高陽院を用いる 院御所が炎上 高陽院殿に御幸
		2	1223	高陽院放火により焼失 その後、再建されず

第三章 周辺遺跡と既往調査

調査周辺地は平安京左京二条二坊九・十・十五・十六町（高陽院）跡の他に、縄文時代晩期～弥生時代の柱穴・炉・溝・流路等が確認された二条城北遺跡の範囲内でもある。

以下に高陽院内の既往調査成果を述べる。尚、今報告では便宜上、高陽院内で実施された調査を古い順から○次調査とする。

高陽院内での調査は過去に10回実施されている。(図3・表2) 高陽院内は比較的遺跡の残存状況が良好で、どの町の調査でも高陽院に関する遺構が検出されている。特に池跡は広大であるために、池を検出している調査例が多い。今調査は11次調査となる。

高陽院の1次調査は九町の東西中央の南部で昭和56年に実施した発掘調査である。この調査で初めて高陽院の池跡とその改修に伴う州浜や景石、柱穴等が出土した。池跡は高陽院の焼失と再建に伴って池跡も修築されていたこと、その改修が4回(SG1-A～D期)行われていることが

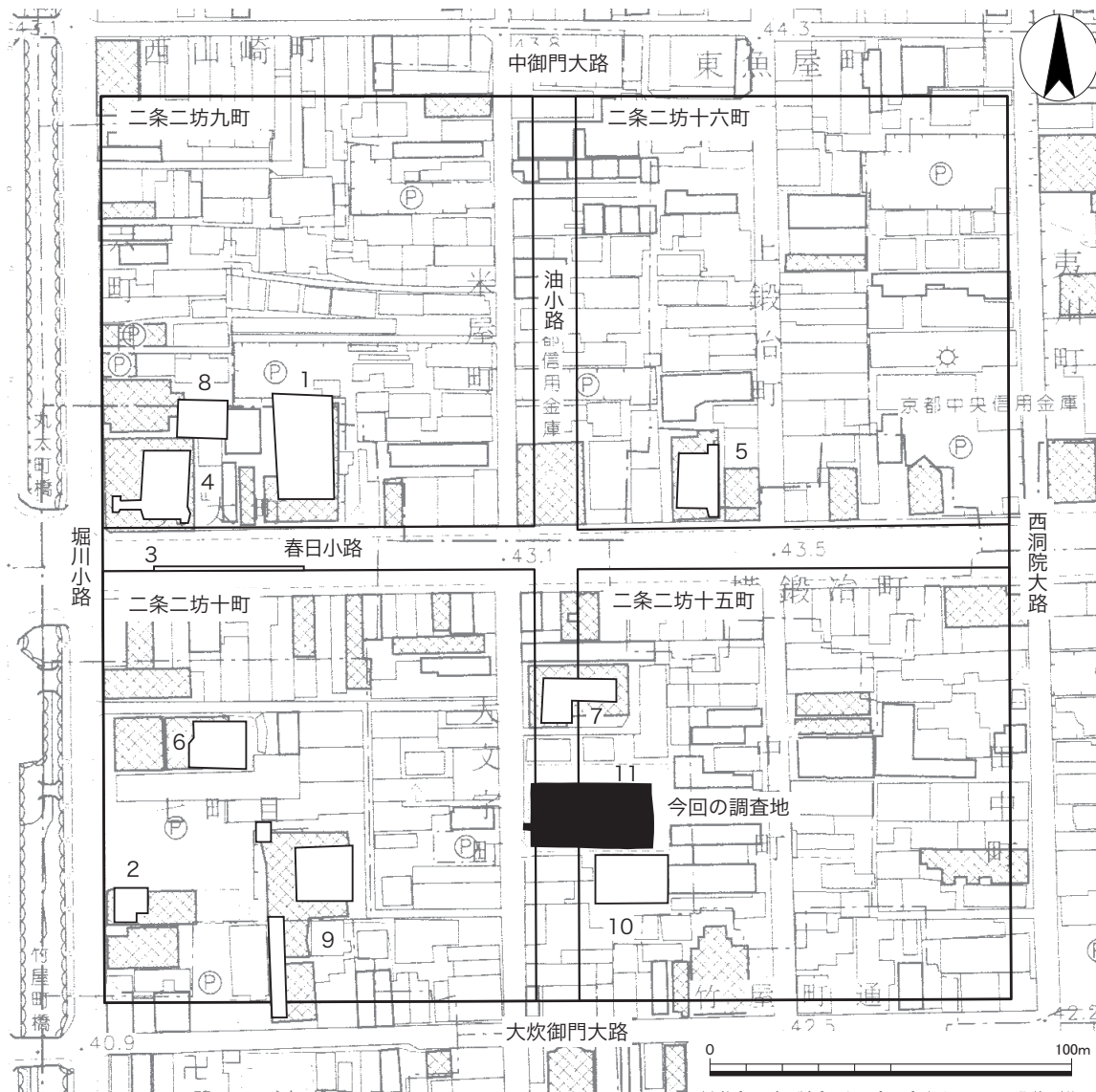


図3 高陽院既往調査位置図 (1:2,000)

表2 高陽院既往調査

	調査位置 調査回数	調査の 種類	調査成果概要	掲載文献
1	左京二条二坊九町 (高陽院1次調査)	発掘	高陽院の4時期(SG1-A~D)にわたる池跡とそれに伴う、州浜・景石・柱穴列を検出した。池は第2・3期の間にも2回の修復が行われていた。	『平安京跡発掘調査概要』昭和56年度
2	左京二条二坊十町 (高陽院2次調査)	立会	高陽院の池跡及び排水路を検出か? 弥生時代の流路を検出。	『京都市内遺跡試掘、立会調査』昭和56年度
3	左京二条二坊十町 (高陽院3次調査)	立会	1次調査の南側、丸太町通の南端で東西方向に約40m間で高陽院の池跡を検出している。縄文時代晩期~弥生時代の流路も確認している。	『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
4	左京二条二坊九町 (高陽院4次調査)	発掘	高陽院の前身である賀陽親王期(平安時代前期)の苑池を検出、平安時代でも園地を確認した。1次調査の池跡西端がこの調査地まで伸びていないことを確認した。	『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
5	左京二条二坊十六町 (高陽院5次調査)	発掘	高陽院の池跡を検出するも1次調査の池跡とは標高差が0.6~1.0m高い位置で検出していることから、別の池と思われる。景石5石が残存。最高重量は1100kgを測る。	『平安京跡発掘調査概要』昭和63年度
6	左京二条二坊十町 (高陽院6次調査)	発掘	高陽院の池西端を確認する。ここでは、汀での造作はなかった。弥生時代の流路を検出。	『平安京跡発掘調査概要』平成元年度
7	左京二条二坊十五町 (高陽院7次調査)	発掘	高陽院の池跡・中島・景石等を検出する。その後に地業をおこない建物遺構を検出している。	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
8	左京二条二坊九町 (高陽院8次調査)	発掘	10世紀の池跡、高陽院の3時期(A~C)にわたる遺構面を検出する。1次調査のSG1-A~C期に相当する。A期で池を検出。B・C期では建物遺構を検出。	『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』
9	左京二条二坊十町 (高陽院9次調査)	発掘	平安時代前期の大炊御門大路路面・北側溝・北築地を検出。高陽院の池跡南端・州浜を4時期にわたり検出する。縄文時代晩期~弥生時代の流路を検出。	『平安京左京二条二坊十町(高陽院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-7
10	左京二条二坊十五町 (高陽院10次調査)	立会	高陽院の池跡南端と州浜を検出する。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告』平成23年度
11	左京二条二坊十五町 (高陽院11次調査)	発掘	高陽院の池跡を検出。	本報告

知れた。丁寧な造りの州浜や池跡を検出したが、絵巻で有名な高陽院の池での舟遊びからは想像もできない位、水深が浅い池（水面から 50 cm 程度）であったことが知れた。

2 次調査は十町の西南隅で昭和 56 年度に実施した立会・試掘調査である。高陽院の池と排水路と思われる溝を検出している。弥生時代の流路を検出している。

3 次調査は十町内の北端、1 次調査の南、丸太町通内の南側で昭和 58 年に実施した立会調査である。この調査では 1 次調査の池が南に続くと考えられる池跡を東西幅約 40 m で確認している。また、縄文時代・弥生時代の土器を含む流路を検出している。

4 次調査は九町の西南部で昭和 63 年度に実施した発掘調査である。高陽院の前身である桓武天皇第七皇子である賀陽親王の邸宅であったとされる。ここでは、平安時代前期の苑地や溝を、平安時代中期の園地や石敷き遺構、高陽院の時期では第 2 面で東西溝、南北方向の石組溝を、第 1 面では築山状の盛り上がりを検出しているが池跡は確認されず、1 次調査の池がこの調査区まで続いていないことを確認した。

5 次調査は十六町の東西中央より西側の南部で実施した発掘調査である。高陽院の園地、景石等を検出した。但し、池底や州浜の標高は 1 次調査のものより 0.6～1.0m 高い位置で見つかっている。1 次調査の池とは別の池と考えられる。

6 次調査は十町の中央よりやや北西で実施した発掘調査である。高陽院の築山と汀部・池底、排水溝と思われる東西溝を検出している。弥生時代の自然流路を検出している。

7 次調査は十五町の南北中心よりやや北側の西端で実施した発掘調査である。高陽院の園地、中島、景石や建物地業を検出している。推定油小路の位置が調査区内にあたるが、検出されていない。

8 次調査は九町の北西部、1 次調査の西側、4 次調査の北西側で実施した発掘調査である。平安時代中期の園地・州浜及び高陽院の 3 期（A～C 期）にわたる遺構を検出している。A 期は池州浜と池底を、B 期は A 期の池を埋めた上に礎石建物跡を、C 期は B 期の建物はそのまま廊を建て替えたものを検出している。A～C 期は 1 次調査の SG 1 - A～C 期に対応する。

9 次調査は十町の東西中央の南部で実施した発掘調査である。平安時代前期の大炊御門大路路面・北側溝・北築地、高陽院の 4 時期にわたる園地、縄文時代～弥生時代の流路を検出している。高陽院の園地では池南端の汀を検出している。

10 次調査は十五町の南北中心よりやや南側の西端で実施した立会調査である。高陽院の池跡及び州浜を検出した。

第IV章 調査

(1) 基本層序

調査区の地形は南北にはほぼ平坦であるが、東西は西側から東側に向かって徐々に高くなり約60 cmの比高差がある。これは、近代以降に堆積された土層により形成され、近現代層が西側から東側にかけて厚くなる。全域を通して地表下0.5～1.0 mまでが近現代層で、それ以下の層はほぼ平坦に堆積する。近現代層以下の基本層序は、江戸時代中～後期（1・2層）の土層が約50 cmの厚さ、暗灰黄色砂泥層（3層）が約30 cmの厚さ、礫を多く含む灰黄褐色砂泥層（4層）が約60 cmの厚さ、灰色泥土層（5層）が約10 cmの厚さで堆積していた。4層は池を埋め戻した土層、5層は池埋土である。以下は黄褐色砂礫層（地山）となる。（図5・6）

表3 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代後期～平安時代末期	池跡	
鎌倉時代～室町時代	柵列2、建物3・5、柵列6、 井戸0082、土坑0120・0183・0213・0391 溝0138・0145・0148・0383	
桃山時代～江戸時代	路面1、柱列4、井戸0166・0172・0348、 土坑0013・0063・0231・0379、溝0315	

(2) 遺構

調査は、残土置き場の関係から3区に分けて実施した。（図4）各区においては、基本的に3層上面（第1面）、4層上面（第2面）、池埋土の5層上面（第3面）、池底で地山面である砂礫層上面（第4面）で調査を行い、各面において記録作業を行った。

遺構は、第1面では桃山時代～江戸時代を、第2面では中世の遺構を検出した。第3面では池

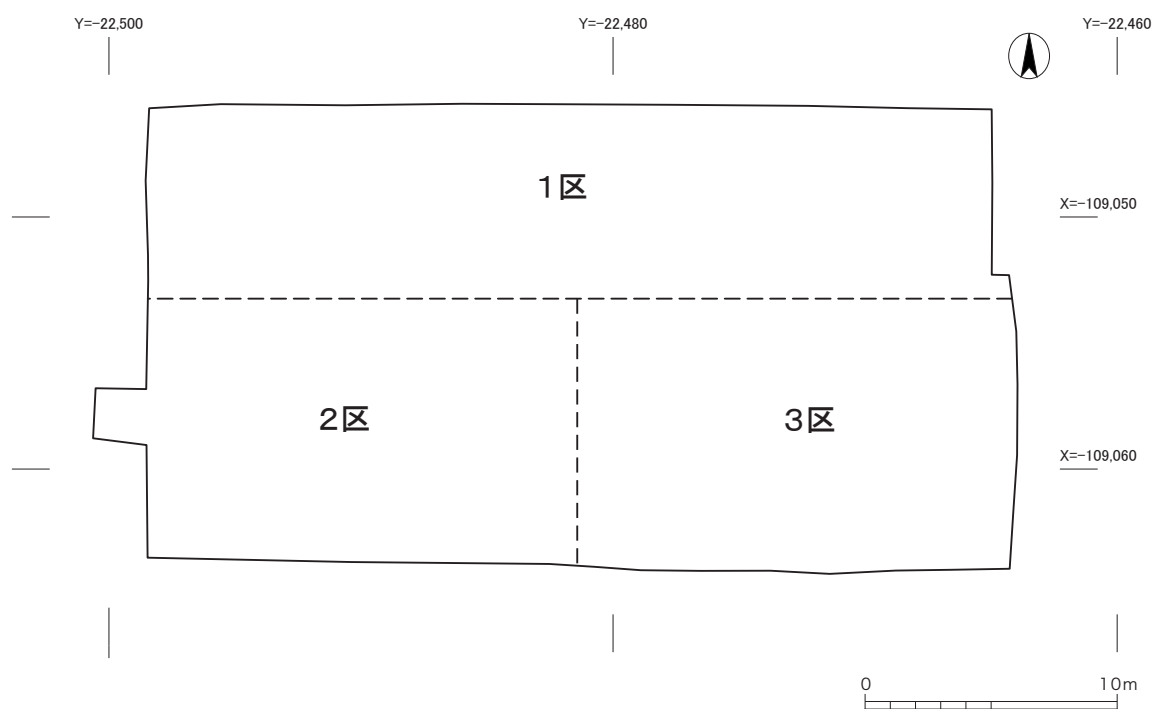


図4 各調査区割図（1：300）

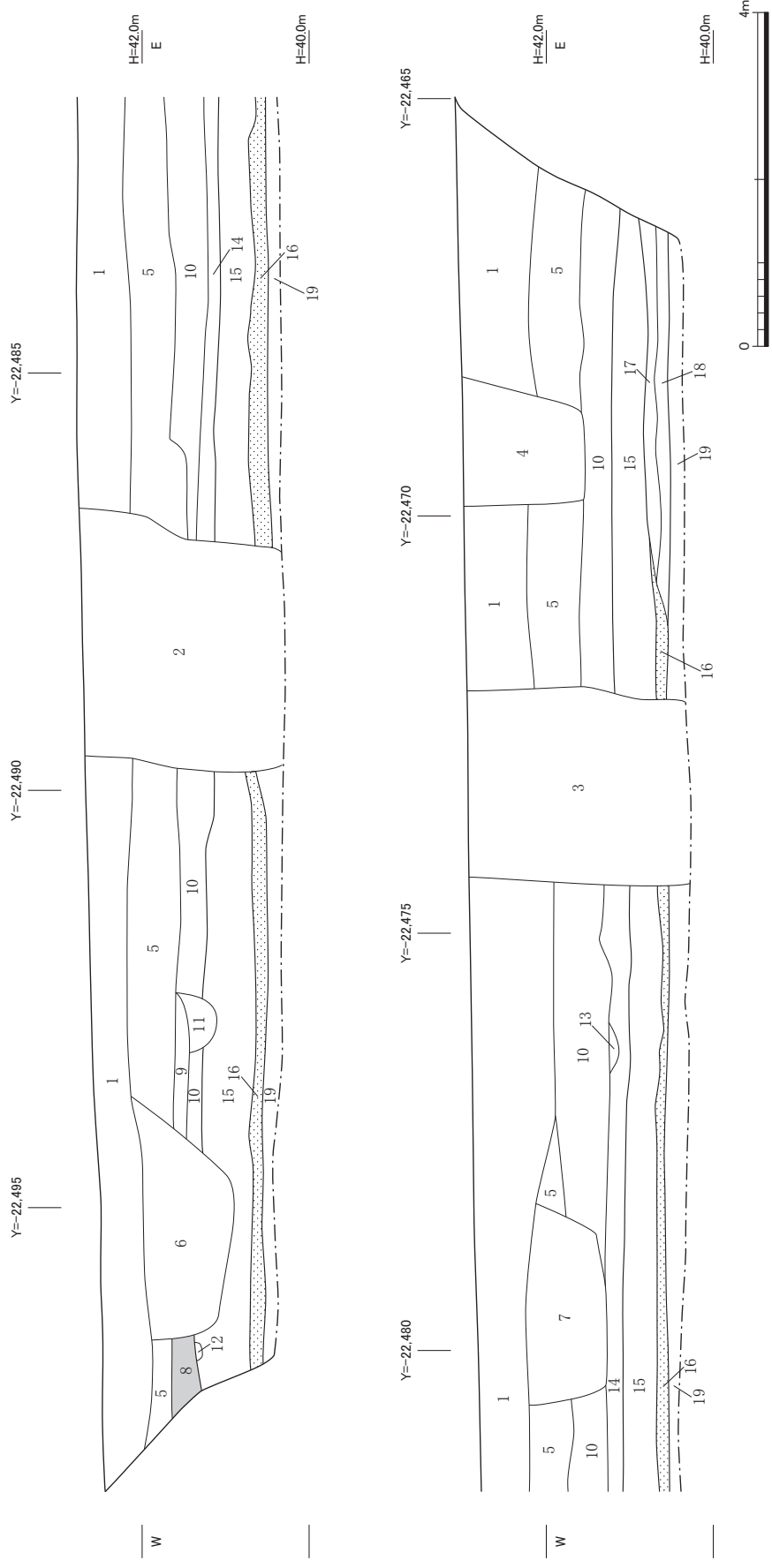
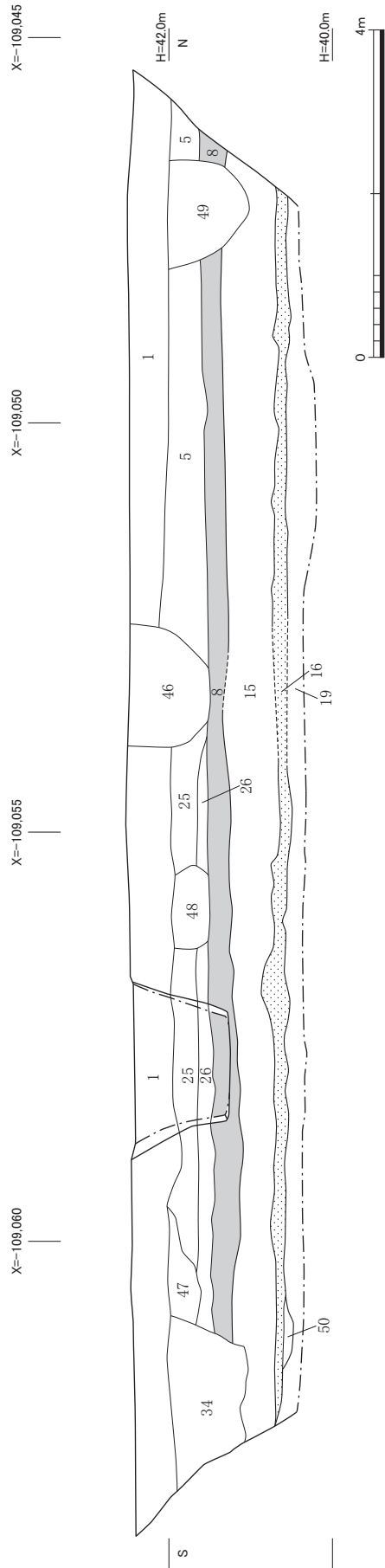


図5 調査区北壁断面図 (1 : 80)

- 1 10YR3/3暗褐色 砂泥 焼土・礫・煉瓦・炭化物多量混<1層>
- 2 10YR3/3暗褐色 砂泥 焼土・礫・煉瓦多量混<土坑0043埋土>
- 3 10YR3/3暗褐色 砂泥 焼土・礫・煉瓦多量混<井戸0049埋土>
- 4 5Y4/1灰色 砂泥<試掘坑>
- 5 10YR3/3暗褐色 砂泥 小礫・土師器・煉瓦・炭化物少量混<2層>
- 6 10YR3/3暗褐色 砂泥 焼土・大礫・瓦・炭化物多量混<土坑0038埋土>
- 7 10YR3/3暗褐色 砂泥 2.5Y6/2灰黄色粘質土ブロック・大礫多量混<土坑0025埋土>
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色 泥砂 大礫・ガラス多量混<油小路路面>
- 9 2.5Y5/2暗灰黄色 砂泥 小礫・土師器混<溝0067埋土>
- 10 2.5Y5/2暗灰黄色 砂泥 大礫・炭化物・土師器混<3層>
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 大礫多量混<溝0148埋土>
- 12 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 大礫多量混<溝0145埋土>
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物・土師器混
- 14 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 礫少量混<4層>
- 15 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 大礫・炭化物・土師器混<4層>
- 16 2.5Y5/1黄灰色 粘土 マンガン混 大礫少量混<5層>
- 17 10YR5/1褐灰色 砂泥 大礫・ガラス多量混<5-1層>
- 18 10YR4/1褐灰色 粘質土 大礫多量混<5-2層>
- 19 2.5Y5/3黄褐色 砂泥 マンガン混 大礫多量混<地山>



- 1 10YR3/3暗褐色 砂泥 焼土・礫・煉瓦・炭化物多量混<1層>
- 5 10YR3/3暗褐色 砂泥 小礫・土師器・煉瓦・炭化物少量混<2層>
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色 泥砂 大礫・ガラス多量含<油小路路面>
- 15 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 大礫・炭化物・土師器混<4層>
- 16 2.5Y5/1黄灰色 粘土 マンガン混 大礫少量混<5層>
- 19 2.5Y5/3黄褐色 砂泥 マンガン混 大礫多量混<地山>
- 25 10YR3/1黒褐色 砂泥 焼土混じり 小礫少量混<2層>
- 26 10YR3/1黒褐色 砂泥 小礫少量混<2層>
- 34 10YR3/3暗褐色 砂泥 礫・土師器・煉瓦・炭化物多量混
- 46 5Y4/1灰色 砂泥<試掘坑>
- 47 焼土 炭化物多量混
- 48 10YR3/3暗褐色 砂泥と焼土の混土
- 49 10YR3/3暗褐色 砂泥 礫・土師器・煉瓦・炭化物多量混
- 50 10YR3/1黒褐色 粘土 小礫・炭化物少量混<池埋土>

図6 調査区西壁断面図 (1 : 80)

埋土、第4面では池底を確認したにとどまった。

以下、調査区毎に説明する。

1. 1区の遺構

1区は、高陽院の池が検出されることを想定し、それを東西に貫くように調査範囲の北半に南北幅8m、東西幅33mを設定し調査を行った。

第1面は、3層上面で成立する遺構である。現油小路の東約25m以東に近現代の井戸跡や廃棄処理用の土坑等が集中していた。その中で桃山時代～江戸時代の遺構を検出した。路面や土坑、柱穴等を検出した。

土坑 0013

調査区西部南で検出した。南北0.7m、東西0.9mの隅丸方形を呈する。深さは検出面より0.4mを測る。石が詰まった状態で検出している。棧瓦が出土している。

土坑 0063

調査区西部で検出した。後述する路面位置の上で検出している。規模は東西2.0m・南北2.1mの隅丸方形を呈し、検出面より深さ0.5mを測る。Ⅷ期の遺物を検出した。

路面 1 (図版6-1)

調査区西端で東西幅2.5mを検出した。調査区の北・南に延び現油小路内にまで西側に広がるものと思われる。路面は路盤を整形した上に礫を強固に搗き固められたもので丁寧に造られている。

第2面は、4層上面で成立する遺構である。

柵列 2 (図8)

調査区東端で東西5間分を検出した。柱穴0079・0083・0147・0111で構成される。柱間は1.95mを測り、柵は調査区外東へ延びるとと思われる。柱穴0079と柱穴0083の間、柱穴0083と柱穴0147の間は攪乱により検出できなかった。柱穴0079は直径約1.0mの円形で深さは検出面より0.6mを測り、底に根石を持つ。柱穴0083は直径約0.8m、深さは検出面より0.6mを測る。底には根石

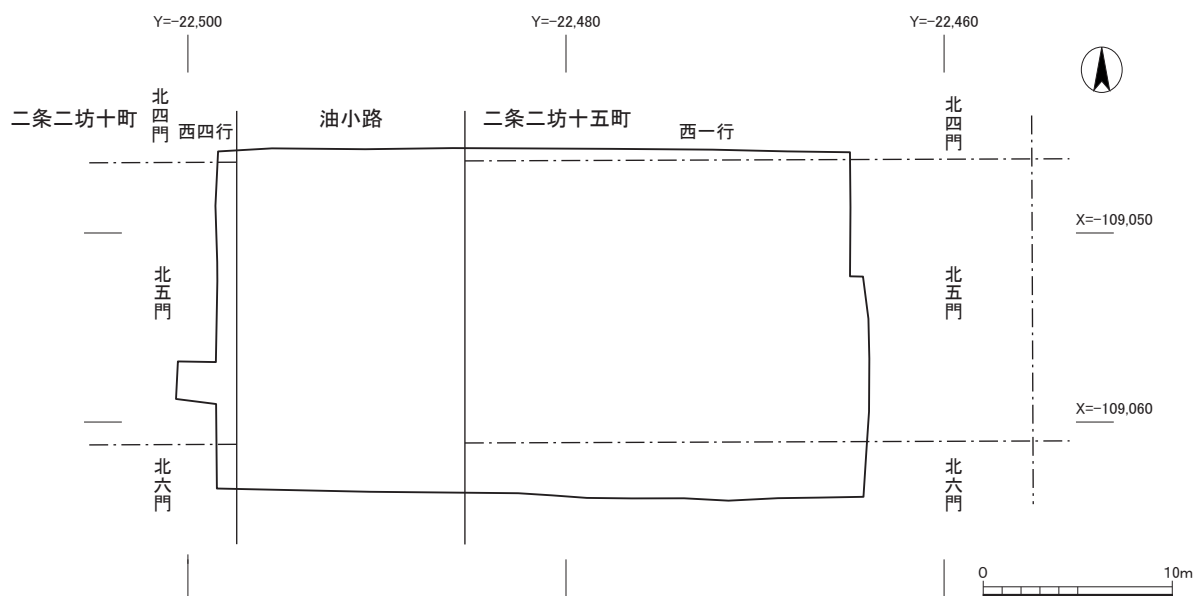


図7 調査区と条坊位置図 (1:350)

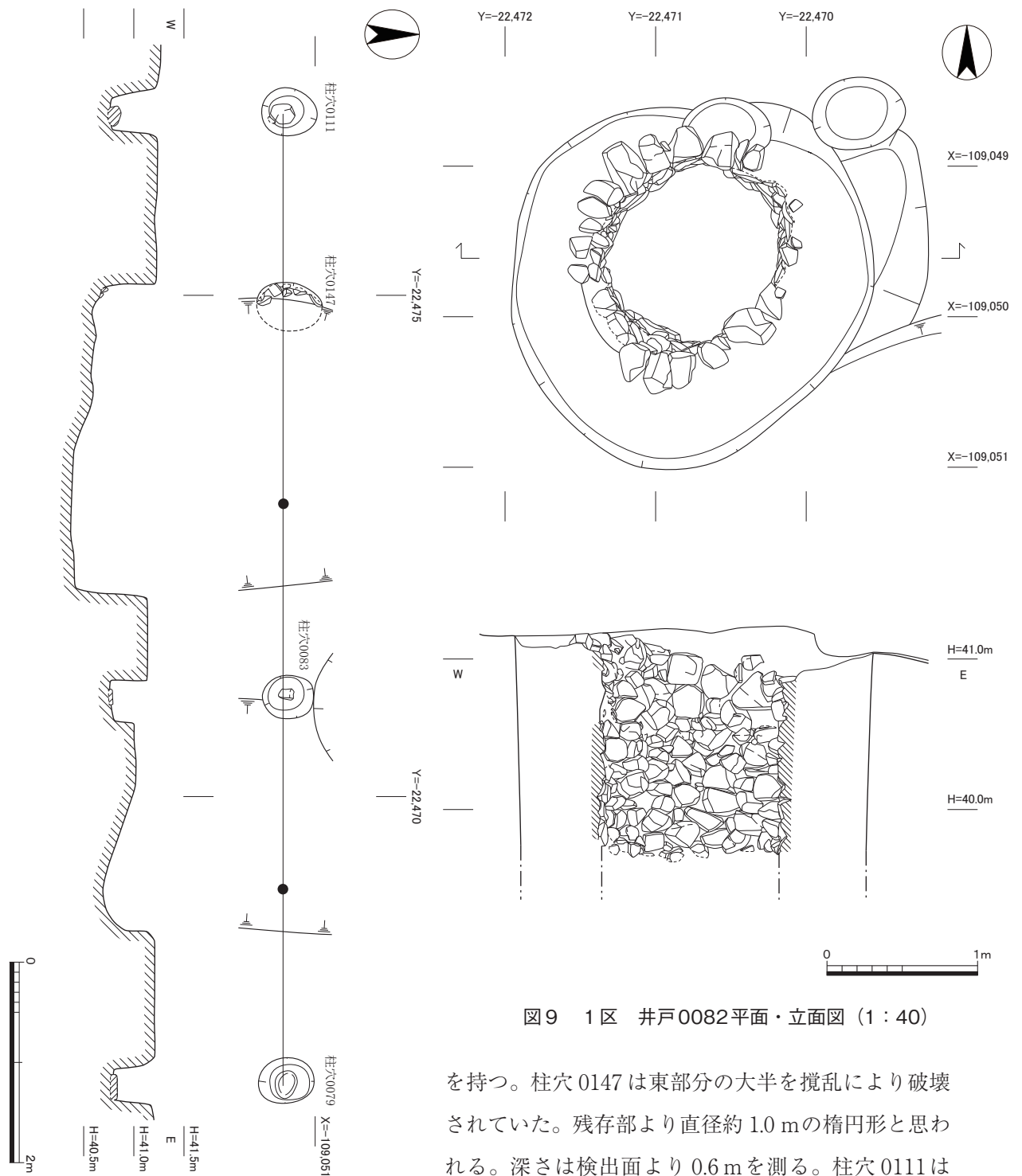


図8 1区 柵列2平面・見通図 (1:60)

図9 1区 井戸0082平面・立面図 (1:40)

を持つ。柱穴0147は東部分の大半を攪乱により破壊されていた。残存部より直径約1.0mの楕円形と思われる。深さは検出面より0.6mを測る。柱穴0111は直径約0.6m、深さは検出面より0.6mを測る。底には根石を持つ。柱穴0079・0083・0111はいずれも、根石をそのままにして柱を抜き取った後に軒瓦を含めた、瓦類を大量に入れて埋め戻されていた。幡枝瓦窯産の陰刻剣頭文軒平瓦がいずれからも出土した。

井戸0082 (図9、図版6-2)

調査区東部で検出した。東西4.2m、南北4.8mのやや横長の楕円形を呈する。中央に石組がある。石組内には巨石が多く、安全上掘下げが不可能と判断した。

溝 0148

調査区西部で検出した。幅 0.6～0.7 m、深さは検出面より 0.5 m を測る南北溝である。溝心は推定油小路西築地心より 4.9 m 東に位置する。調査区東西中央やや西寄りでも南北溝 0138 を検出した。幅約 0.9 m で深さは検出面より約 0.1 m を測る。南ほど浅くなる傾向にあり、2 区では検出できなかった。

当初は溝 0148 と溝 0138 が溝心々間で 6.2 m あり、位置的にも両溝が油小路推定内にあることで、油小路の西・東側溝と考えたが、溝の深さが、両溝でかなり違うことや溝 0138 が 2 区の調査で検出できなかったことで、溝 0148 は油小路西側溝と断定できなくなった。

調査区西端近くで南北溝 0145 を検出した。幅は約 0.5 m で深さは検出面より約 0.3 m を測る。この溝も推定油小路内にあるが、検出した路面 1 の直下であり、溝埋土も砂が混じっていることから路面に伴う暗渠の可能性はある。

土坑 0120

調査区中央北側で検出した。東西幅 5.5 m、南北 2.0 m の不定形である。深さは検出面より 0.6 m を測る。

その他、10 数基ほど根石を持つ柱穴を検出したが、調査区の南北幅が狭いこともあり、建物として復元できるものはなかった。

第 3 面は池底に溜まる池埋土上面で調査した。

池跡（図版 3・8）

調査区全面が池で池埋土（5 層）もほぼ全面にあることを確認したが、その他の遺構は全くなかった。一部、調査区北東隅で池埋土がなくなり、泥土に礫の多い状況の池底（5 - 1 層）が確認できた。この池底の下層に、もう一時期古い池埋土（5 - 2 層）が厚さ約 5 cm で、第 4 面と同様に池底上面に堆積していた。高陽院のある段階で何らかの手が加わり、新たな汀が形成されたもの的一部分と思われ、ゆっくりとした傾斜を持って東側の陸部に上がっていくと思われる。

第 4 面は池埋土を除去した地山面での池底で調査した。調査区全面が池底で、それ以外の遺構は全くなかった。池底は高陽院の多くで検出されている池底と同様に所謂、砂礫を敷いた状況のもので、堅くしまっている。池埋土がはがれるように取れ、堅くしまった池底が検出できる。

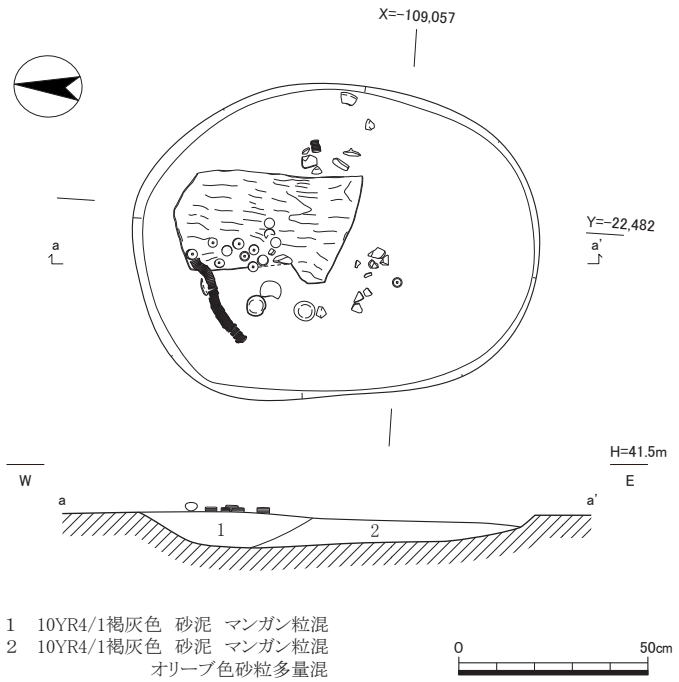
2. 2 区の遺構

基本層序

現地表面は標高 42.7～42.4 m で、東から西へ向かって低くなっている。堆積土は近現代盛土、1～5 層からなる。調査は 3 層上面、4 層上面、5 層上面、地山面で遺構面を設定し、第 1 面～第 4 面として行った。5 層直下は基盤層となる。

近現代盛土は層厚 0.5～1.0 m で、東から西に向かって薄くなる。その直下に近世の整地土が堆積する。当該層は 10YR4/1 褐灰色砂泥からなる 1 層及び 2 層で、層厚は 0.3～0.7 m である。近世整地土を除去すると 3 層上面に達する。3 層は中世末～近世初頭の整地土で、2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥からなり、層厚は 0.2～0.4 m である。3 層直下には 4 層が堆積する。4 層は 10YR4/1 褐灰

色ないし 10YR4/2 灰黄褐色砂泥からなり、層厚は 0.5～0.7 m である。当層内には礫、炭化物、主に 11 世紀の土師器、瓦、緑釉陶器が包含されていた。また、短時間で人為的に堆積したものと考えられることから、池を埋め立てた際の客土と思われる。その出所として、緑釉陶器や、1 区及び 3 区の 4 層に緑釉瓦が包含されていたことから、平安宮内が想定される。5 層は 2.5Y5/1 黄灰色粘土で礫が少量混じる。層厚は 0.1～0.3 m で表面に凹凸はあるが水平に堆積しており、水流の痕跡は見られない。遺物の包含量は少ない。池の埋土である。



- 1 10YR4/1 褐灰色 砂泥 マンガン粒混
- 2 10YR4/1 褐灰色 砂泥 マンガン粒混
オリーブ色砂粒多量混

図10 2区 土坑0231 平面・断面図 (1:20)

第1面

近世の遺構

調査区の壁面観察から、近世遺構は 2 層から切り込まれ、3 層にまで達している。検出された近世遺構の大半は、埋土に焼土とともに炭化物、棧瓦等が包含されており、廃棄土坑と思われる。その他、井戸 2 基、屋敷墓の可能性のある土坑を 1 基検出した。

井戸 0166

平面円形の井戸で、掘方の直径 1.7 m、井戸枠は漆喰製で直径約 0.9 m の円形である。

井戸 0172

南北 1.5 m、東西 1.2 m の楕円形平面の掘方を有する瓦井戸で、枠内寸は直径 0.7 m である。

土坑 0231 (図 10、図版 10 - 2)

調査区東端中央部で検出した土坑で、南北長 1.07 m、東西長 0.83 m の楕円形平面を呈する。検出面から遺構底部まで深いところで約 0.1 m と極浅いことから、遺構上部の大半が削平されているものと考えられる。遺構検出面とほぼ同標高で銭緡一束、数枚ずつ重なった銭が計 42 枚、及び土師器皿 25 枚が共伴して出土した。銭緡の残存状況は悪く、錆がかなり進行していたが、残存長と銭貨一枚あたりの厚さから、枚数は 88～97 枚と推定される。これらのうち、表面の文字を読み取ることができた物 7 点中 6 点が寛永通宝、1 点が淳化元宝であった。また、これら遺物の直下に木板の痕跡が確認でき、銭の一部には木質が付着しているものが認められた。このことから、銭は木製の板状の物に載せられていたか、或いは木箱状の入れ物に納められていたものと思われる。遺構の底部のみを検出したため、詳細は不明であるが、墓の可能性はある。

路面 1

南端部が攪乱によって破壊されていたが、南北長 7.7 m、幅 1.7 m にわたって礫敷きの路面を検出した。調査区西辺の一部を西へ拡張したところ、礫敷きが更に延びていることを確認したが、路面の西端を検出することはできず、調査区外へ続くと考えられる。拡張部での路面検出幅は約 40 m である。礫敷き上面の標高値は 41.5 m である。

路面の構築方法について、地表面（3層上面）から 0.3 m ほど掘り下げた後に径 6.0～8.0 cm の礫を混ぜた灰黄褐色泥砂を入れて路盤を構築後、その上に粗い砂を敷き、その上面に径 4.0 cm 前後の礫を敷き並べて搗き固めたものと考えられる。

土坑 0183

調査区中央部北寄りで検出した南北長 5.3 m 以上、最大東西幅 2.7 m、最小東西幅 0.8 m の不定形土坑である。検出面からの深さは 0.3 m で、埋土中には 15 世紀の遺物が包含されており、3 層中に包含される遺物との時期差が見られないことから、3 層上面（第 1 面）の生活面を造成する際の整地単位のひとつと考えられる。

土坑 0213

調査区南東隅で検出した南北長 3.0 m、東西長 6.0 m の楕円形土坑で、15～16 世紀の遺物が包含されていた。土坑 0183 と同種の土坑と思われる。

第 2 面

鎌倉時代～室町時代の遺構面で、第 1 面に比して遺構密度は低い。

溝 0148

調査区中央部西寄りで検出した南北溝で、北は 1 区に延びる。検出幅は狭い箇所では 0.7 m、広い箇所では 0.8 m、深さ約 0.4 m である。

溝 0315

調査区西端部で検出した南北溝で、検出幅は 0.3 m、検出面からの深さは約 0.15 m である。北は 1 区で検出された溝 0145 につながる。路面 1 に伴う暗渠の可能性はある。

建物 3（図 11）

調査区南東部で検出した柱穴 0261・0280・0285・0208・0294 からなり、上記溝 0148 と同時期のものと考えられる。東西二間、南北二間分を検出したが、全体規模は不明であり、柵列の可能性も考えられる。

鎌倉時代初頭の柱穴を数基検出したが、建物としてのまとまりはなかった。

第 3 面

池跡（図版 12 - 1）

平安時代後期～末期の池埋土である 5 層上面で精査を行い、遺構検出を試みたが、特筆すべき遺構は検出されなかった。5 層は上述したように層厚 0.1～0.3 m の水平堆積層であるが、上面については小さいながら凹凸が認められた。水が流れた痕跡は認められない。一方で、植物遺体など有機物はなく、土器などの遺物もほぼ包含されていない。このことから、調査区に池が構築さ

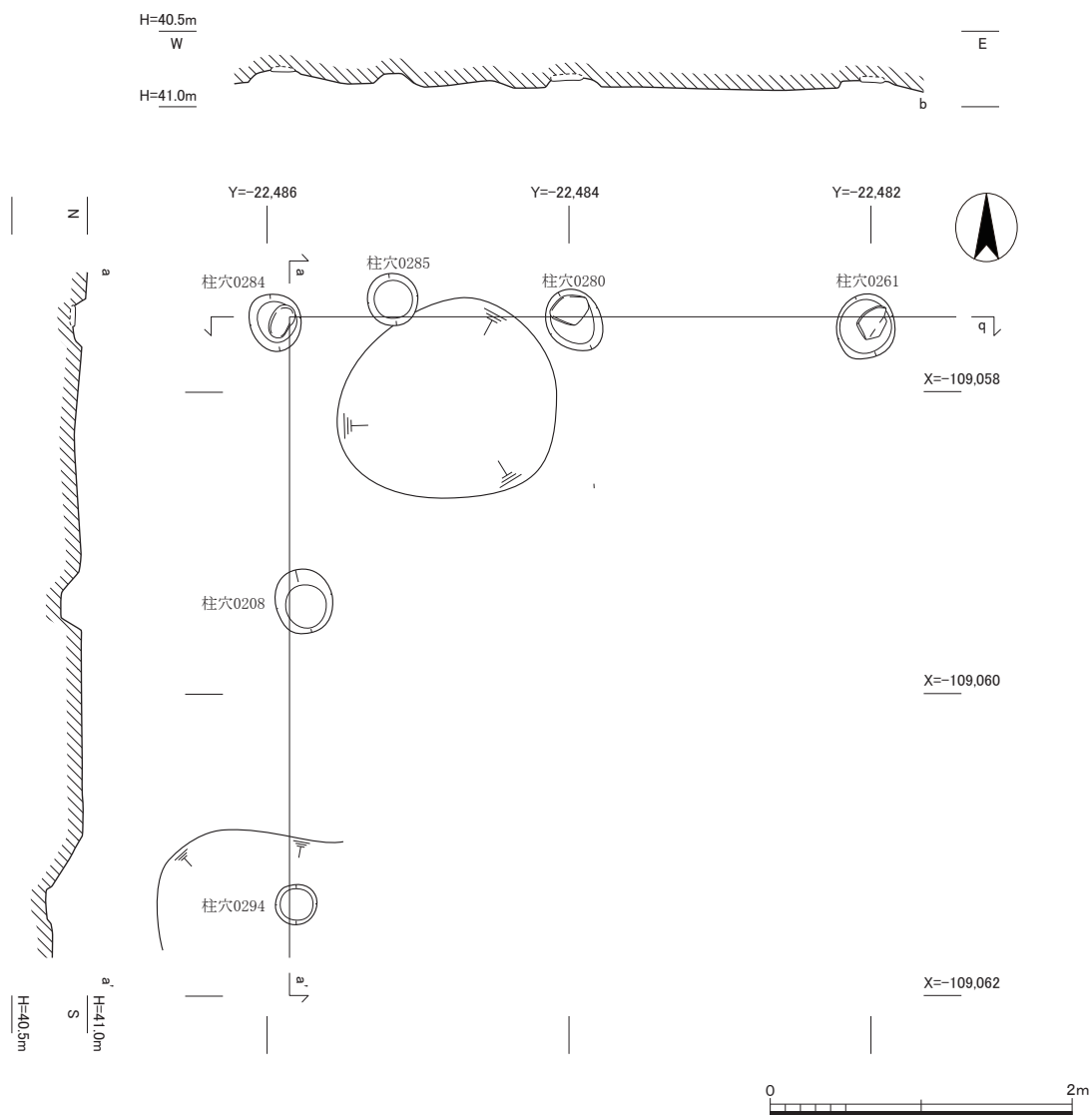


図11 2区 建物3平面・見通図 (1:50)

れてから13世紀初頭に埋め立てられる直前まで、池水の清浄さを保つための管理がなされていたことを想定することができる。

5層を除去すると池底面が露出するが、この面は礫を多量に包含する2.5 Y 5/3黄褐色砂泥によって形成されている。この堆積土は調査地における基盤層（地山）を形成するものであり、池底面を構築するために礫敷きなどの工事を行った形跡は認められなかった。

3. 3区の遺構

1・2区と同じく、3区にて検出した遺構を第1面（3層上面）、第2面（4層上面）、第3面（5層上面）・第4面（地山面）で調査した。以下、各面ごとの主要遺構について概説する。

第1面

江戸時代の柵列・井戸・廃棄土坑等を検出した。

柵列4

3区北東部にて検出した。柱穴 0362・0364・0342 で構成される。東西軸2間分で、X=-109,054

のライン沿いに並ぶ。柱穴の形状は直径0.45～0.55mの円形を呈し、深さは0.2～0.3mである。軸線は北西～南東方向に約1°振る。柱間は西より2.4m・3.6mと不等間である。埋土は焼土混じりの黄灰色砂泥で、棧瓦が大量に出土した。

井戸 0348

3区南東部にて検出した。円形の石組井戸である。掘方の直径は1.2m、石組の内径は0.9m。埋土は掘方・枠内ともに焼土混じりの黄灰色砂泥である。井戸底が地山面の砂礫層で止まる。地下水を引くまで達していない可能性が高く、掘方・枠内の埋土が同質であることから、井戸としての構築を途中で取り止めたものであると推測される。遺物に関しては、棧瓦を確認している。

土坑 0379

3区南半中央にて検出した。平面長方形の土坑である。東西軸2.3m、南北軸1.8m、検出面からの深さ0.8mを測る。埋土は褐色細粒砂で、断面形は方形である。遺物はX期新～XI期古に属する土師器皿、瓦、陶磁器類、瓦器火鉢・羽釜、金属製品等が出土している。

第2面

鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・建物・柵・多数の柱穴を検出した。鎌倉時代初頭の遺構は確認できなかった。

溝 0383 (図12・図版13-2)

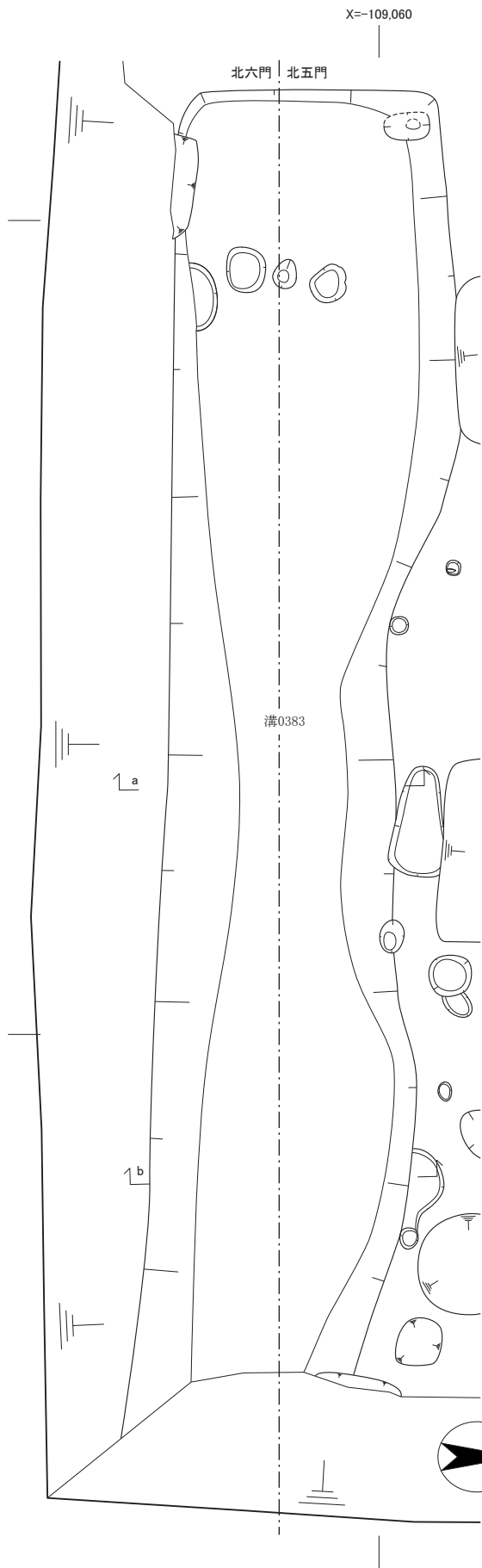
3区南半にて検出した。東西方向の溝である。3区南西部にて西端が確認されたが、東は調査区外に延びている。検出長15.8m、最大幅1.6m、検出最大深0.6m。断面形は逆台形を呈し、埋土は暗灰黄色砂泥である。土師器皿、瓦、瓦器鍋・羽釜・ミニチュア土器、陶磁器、石鍋、鉄釘等が出土している。土師器皿が組成の大半を占め、完形品が多い。また、瓦器羽釜を模したミニチュア土器も出土している。時期はⅦ期に属する。また、平安時代の緑釉陶器・灰釉陶器・猿面硯・土師器高坏等も確認しており、4層を切り込んだ遺構のため、その遺物が混入したと考えられる。四行八門の北五門と北六門の境界ラインに位置し、西端は推定油小路東築地心より4.3m東に位置する。南北の宅地を区切る区画溝と考えられる。

土坑 0391

3区北西部にて検出した。平面隅丸長方形の土坑である。南北軸1.2m、東西軸0.5m、検出面より深さ0.4mを測る。埋土は炭混じりの黄灰色粘質土で、断面形は方形を呈する。Ⅸ期新に属する土師器皿と施釉陶器の甕の破片が少量出土した。

建物 5 (図13)

1区南東部・3区北東部にて検出した。梁行2間・桁行2間以上を想定した東西棟の掘立柱建物である。北五門に位置する。南北は柱穴0101・0421・0428、東西は柱穴0101・0081で構成されており、柱間は南北1.9m・1.9m、東西3.8mである。柱穴の形状は直径0.3～0.45mの円形を呈し、深さは0.1～0.25mである。埋土は褐色砂泥・黒褐色砂泥で、Ⅸ期中に属する土師器皿の細片や施釉陶器の甕等が出土している。建物の南側・西側は確認できなかったが、南側は柱穴0428以南に並ぶ柱穴を確認していないことから、南北2間にとどまると考えられる。西側は柱穴0081以南に

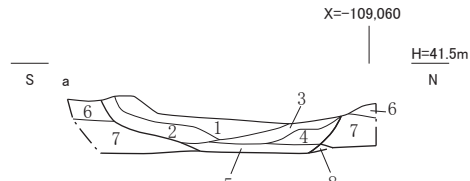


X=-109,060
Y=-22,480

溝0383

1 a

1 b

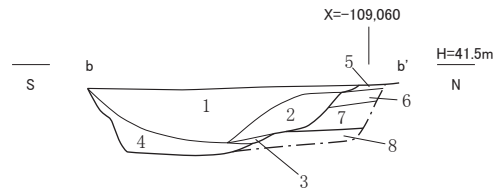


- 1 2.5Y5/1黄灰色 砂泥 φ3~5cmの礫少量混 炭化物混
- 2 2.5Y5/1黄灰色 泥砂 φ5cmの礫多量混 炭化物混 土器多量混
- 3 10YR5/1褐灰色 砂 炭化物・土器多量混
- 4 10YR5/2灰黄褐色 砂泥 φ5cmの礫・土器多量混
- 5 10YR5/1褐灰色 粘土 φ5~20cmの礫混
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色 砂泥 φ3~5cmの礫少量混
- 7 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 φ3~5cmの礫少量混
- 8 2.5Y5/1黄灰色 粘土 φ3~5cmの礫少量混 5層

溝0383

Y=-22,470

4層



- 1 2.5Y5/2暗灰黄色 砂泥 φ3~5cmの礫少量混 炭化物混
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色 泥砂 φ5cmの礫・土器・炭化物多量混
- 3 10YR5/1褐灰色 粘土 φ5~20cmの礫混
- 4 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 φ3cmの礫・炭化物・土器混
- 5 2.5Y5/2暗灰黄色 砂泥 φ3~5cmの礫少量混
- 6 10YR4/4褐色 粘土 φ3~10cmの礫混
- 7 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 φ3~5cmの礫混
- 8 2.5Y5/1黄灰色 粘土 φ3~5cmの礫混 5層

溝0383

4層



図12 3区 溝0383平面・断面図 (1:80)

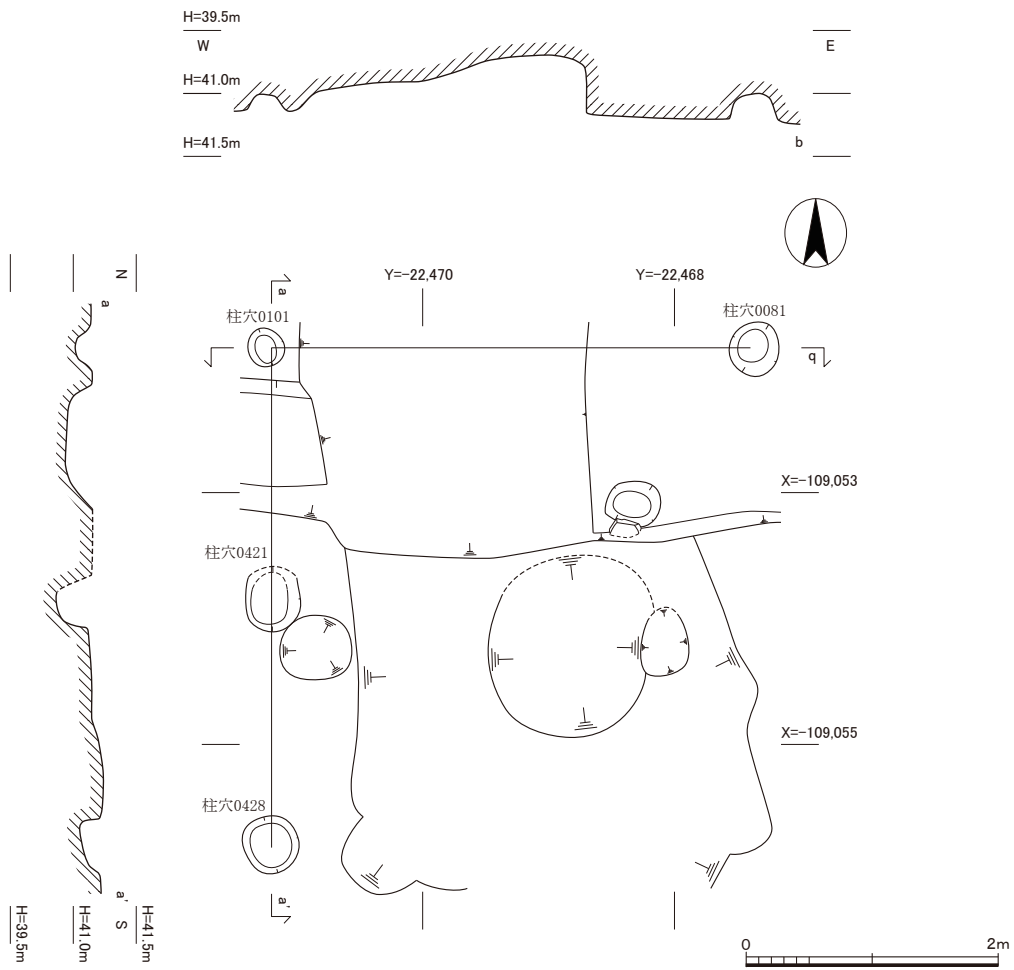


图13 3区 建物5平面・見通図 (1:60)

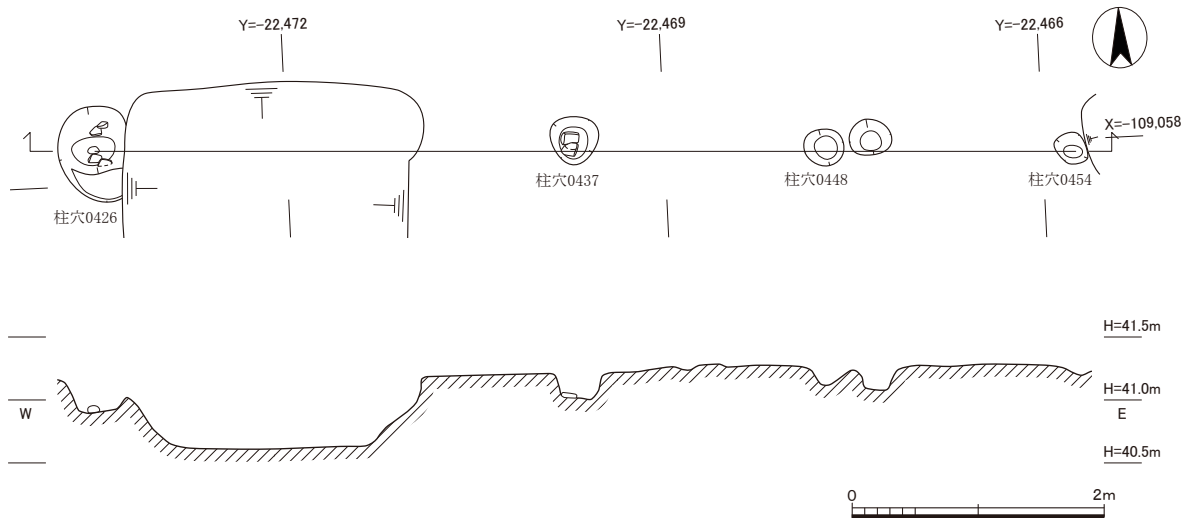


图14 3区 柵列6平面・見通図 (1:60)

て対応する柱穴を確認しておらず、調査区外に広がると想定される。柱穴 0101・0081 間は江戸時代末期の攪乱により、柱穴が削平されている可能性がある。

柵列 6 (図 14)

3 区東部にて検出した。柱穴 0426・0437・0448・0454 で構成された柵列で、X=-109,058 のライン沿いに 4 間分 (7.7m) 並ぶ。柱穴の形状は柱穴 0426 のみ長軸 0.8m、短軸 0.4m の楕円形、それ以外は直径 0.3m の円形を呈する。深さは 0.05 ~ 0.2m。軸線は東西軸より北西~南東方向に約 25° 振る。柱間は西から 3.8m・2.0m・1.9m で、柱穴 0426・0437 間は江戸時代の攪乱により柱穴が削平されている。柱穴 0426・0437 では礎石を確認している。埋土は柱穴 0426 のみ灰黄褐色粘質土、それ以外は黄灰色砂泥となる。Ⅸ期新に属する土師器皿、瓦器片が出土している。

第 3 面

池跡 (図版 14 - 2)

1・2 区と同じく、3 区においても平安時代末期の高陽院の池埋土を全面で確認している。標高 40.6m 前後にて池埋土である 5 層を検出し、5 層上面にてその他遺構の検出を試みたが、確認できなかった。

第 4 面 (図版 15)

平安時代末期の池埋土である 5 層を掘削し、標高 40.5m 前後にて池底面である砂礫層を全面で確認した。3 区南半は鎌倉時代の溝 0383 によって池埋土が薄く削平されている箇所があり、1・2 区と比べて出土遺物の量は少なかったが、土師器・三足盤脚部・瓦・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器等を確認している。

第V章 遺物

今回の調査では、遺物整理箱 102 箱の遺物が出土した。内訳は土器・瓦類がほとんどで、銭貨等の金属器や骨等が出土している。また、池を埋めた土層（4層）からは弥生土器、石包丁、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、緑釉の鴟尾・軒丸瓦・平瓦等が出土したが、どれも土圧を受けたためか小片が多い。

弥生時代の土器、石包丁が池を埋め戻した土層である4層から出土している。

平安時代中期～末期の遺物は池埋土である5層及び4層より出土している。

鎌倉時代の遺物は4層及び4層上面の柱穴から出土している。

室町時代の遺物は4層上面の溝や井戸、土坑等から出土している。

桃山時代～江戸時代前期の遺物は3層上面の井戸や土坑等から出土している。

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Aランク点数	Bランク点数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石製品			石包丁 1点	
平安時代中期～末期	土師器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、瓦器、瓦		土師器 14点 白色土器 2点 須恵器 5点 緑釉陶器 2点 灰釉陶器 3点 青磁 1点 瓦器 3点 瓦 9点、硯 1点	緑釉瓦 3点 土師器 11点 瓦器 2点	
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦器、陶器、灰釉陶器、焼締陶器、青白磁、石製品、瓦		土師器 24点 瓦器 8点 陶器 1点 灰釉陶器 1点 焼締陶器 3点 青白磁 1点 石鍋 1点、瓦 8点	土師器 19点 瓦器 3点 瓦 11点	
桃山時代～江戸時代	土師器、灰釉陶器、焼締陶器、施釉陶器、土製品		土師器 18点 灰釉陶器 1点 焼締陶器 1点 施釉陶器 2点 伏見人形 1点	土師器 4点 施釉陶器 3点 銭 130点	
合計		95箱	110点（3箱）	187点（4箱）	88箱

※コンテナ箱数の合計は整理及びランク分けしたため、出土時より7箱減少している。

1. 土器類（図15～17、図版17）

5層出土土器（図15-1～9）大半の遺物が小破片であった。土師器皿が大半を占め、須恵器、

灰釉陶器、瓦器等が出土している。土師器には皿A（1～5）、皿N（6, 7）、高坏（8）等がある。皿Aは口径が10.0 cmと12.0 cm前後のものがある。皿Nは13.6 cmである。高坏は胴部のみである。須恵器（9）も蓋の一部のみである。5層出土土器はV期新～VI期古に属する。

4層出土土器（図15 - 10～30、図版17 - 3）土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、黒色土器、瓦器、緑釉の鴟尾・軒丸瓦・平瓦、軒瓦、平瓦が出土している。大半の遺物が土圧のために小破片となっていた。10～15は土師器皿である。10は皿Aで口径10.9 cm、器高1.4 cmを測る。11～15は皿Nである。11は口径10.8 cm、器高1.5 cmを測る。12・13は口径14.8 cm、器高2.6 cmと2.4 cmを測る。14は口径15.6 cm、器高2.6 cmを測る。15は口径15.7 cm、器高2.3 cmを測る。16、17は白色土器である。16は椀で口径16.8 cm、器高は不明である。17は高坏である。18～20は瓦器である。18は皿である。口径7.8 cm、器高1.3 cmを測る。19、20は脚付羽釜の脚部である。21～24は須恵器である。21は杯Aで口径12.3 cm、器高3.7 cmを測る。22は椀で口径16.1 cm、器高は4.3 cmを測る。23・24は鉢である。23は口径18.6 cm、器高は不明である。24は口径22.8 cm、器高は不明である。25・26は灰釉陶器椀である。25は口径12.4 cm、器高は3.4 cmを測る。26は底部底に墨書がなされているが、文字は不明である。灰釉陶器27は椀である。口径15.1 cm、器高は5.2 cmを測る。28・29は緑釉陶器である。28は皿で口径10.4 cm、器高は2.3 cmを測る。29は椀で底径

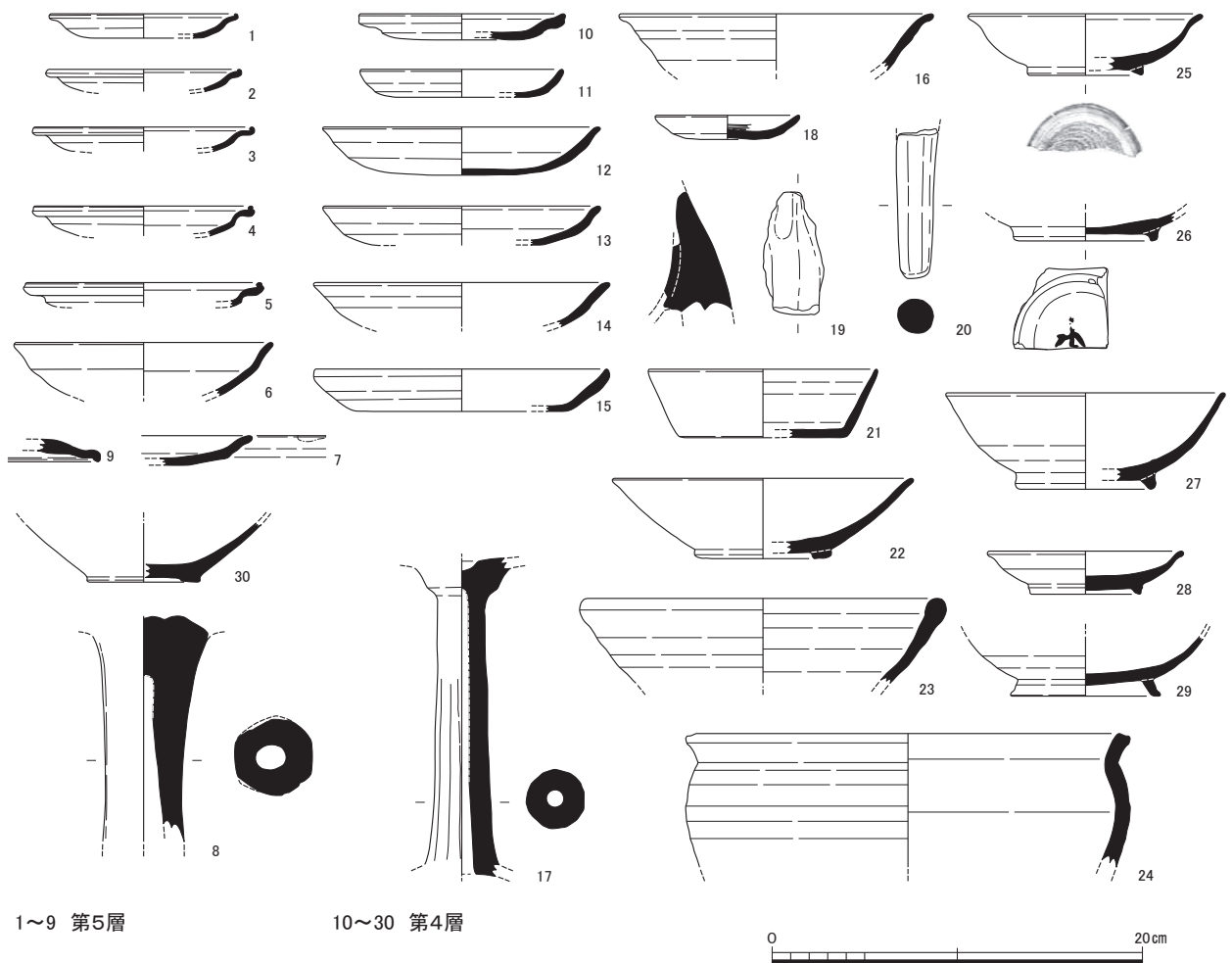


図15 遺物実測図1（1：4） 第4層・第5層

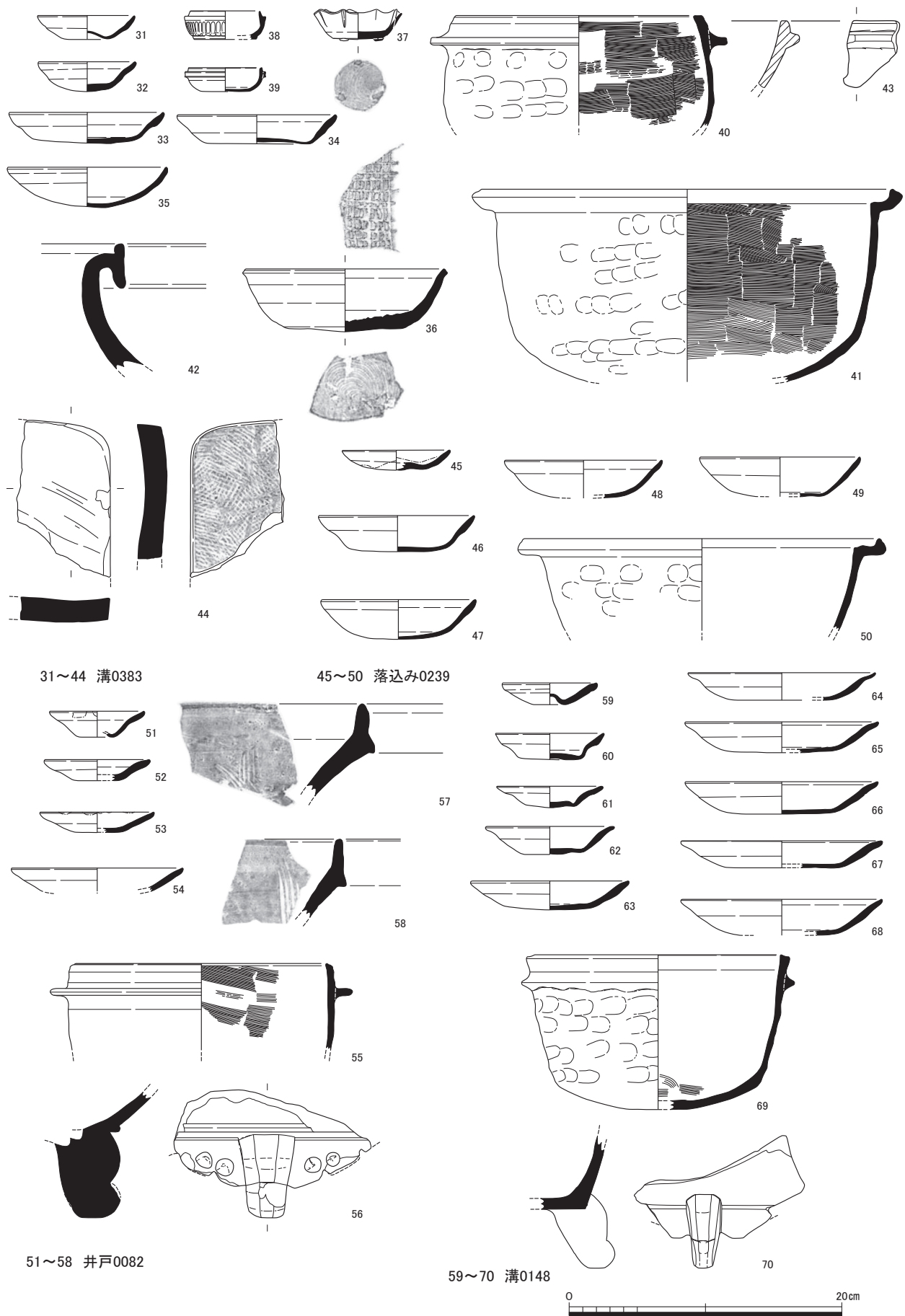


图16 遺物実測図2 (1:4) 溝0383・落込み0239・井戸0082・溝0148

8.0 cmを測る。30は越州窯の青磁碗である。底径5.8 cmを測る。4層は埋戻し土であることから様々な時代の遺物が混入しているが、最も新しい土器や軒瓦からV期新もしくはVI期古に属する。

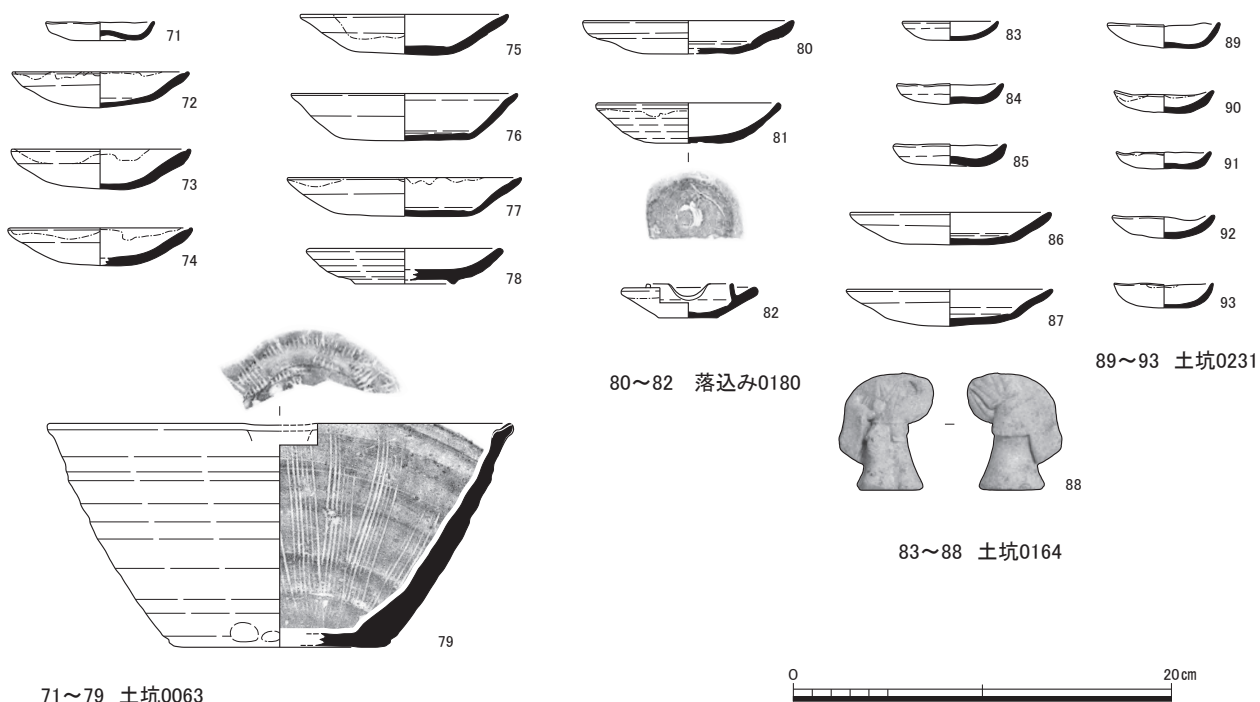
溝 0383 (図 16 - 31 ~ 44、図版 17 - 1・2) 今調査の遺構で一番多くの遺物が出土した。出土遺物は整理箱 8 箱である。土師器、灰釉陶器 (山茶碗)、瓦器、焼締陶器、青白磁、石鍋等が出土した。須恵器の猿面硯の破片が 1 点出土している。31 ~ 35 は土師器皿で 31 は皿 Sh でいわゆるへそ皿である。口径 7.2 cm、器高は 1.8 cm を測る。32、35 は皿 S で 32 は口径 7.2 cm、器高 2.2 cm、35 は口径 11.6 cm、器高 3.0 cm を測る。33、34 は皿 N で 33 は口径 11.2 cm、器高 2.3 cm、34 は口径 11.8 cm、器高 2.1 cm を測る。36 は瀬戸産陶器皿で、おろし皿である。口径は 14.8 cm、器高は 4.6 cm を測る。37 は灰釉 (山茶碗) の皿で輪花状を呈する。底部にトチン痕を残す。口径 5.6 cm、器高 2.2 cm を測る。38 は青白磁の合子身である。釉は明緑色を呈する。口径は 5.0 cm、器高 2.1 cm を測る。39 は瓦器のミニチュア羽釜である。口径 5.4 cm、器高 1.8 cm である。40 は瓦器の羽釜で、口径 18.0 cm、器高は不明である。41 は瓦器の鍋で、口径 30.2 cm、器高 14.1 cm を測る。42 は常滑産の焼締陶器の甕である。口縁部の一部のみで口径や器高は不明である。43 は滑石製の石鍋である。口縁部のみの小破片で口径や器高は不明である。44 は須恵器猿面硯の破片である。4層からの混入と思われる。溝 0383 出土遺物は VII 期に属する。

落込み 0239 (図 16 - 45 ~ 50) 土師器、瓦器等が出土している。45 ~ 49 は土師器皿 S である。45 は口径 7.9 cm、器高 1.5 cm を測る。46 は口径 11.3 cm、器高 2.7 cm を測る。47 は口径 11.3 cm、器高 2.9 cm を測る。48 は口径 11.4 cm、器高 2.8 cm を測る。49 は口径 11.9 cm、器高 2.9 cm を測る。50 は瓦器鍋である。口径 26.0 cm を測る。器高は不明。落込み 0239 出土遺物は VIII 期新 ~ IX 期古段階に属する。

井戸 0082 (図 16 - 51 ~ 58) 土師器、陶器、瓦器等が出土した。51 は土師器皿 Sh である。口径 6.9 cm、器高 1.9 cm を測る。52 ~ 54 は土師器皿 N で 52 は口径 7.6 cm、器高 1.6 cm を測る。53 は口径 8.4 cm、器高は 1.5 cm を測る。掘方から出土した。54 は口径 12.6 cm、器高 2.0 cm を測る。55、56 は瓦器で 55 は羽釜で、口径 18.4 cm を測る。器高は不明である。56 は火鉢で脚部のみの破片である。57、58 は焼締陶器の播鉢である。57 は小片で大きさは不明である。信楽産。58 は小片で口径、器高共に不明である。掘方から出土した。備前産。井戸 0082 出土遺物は IX 期中 ~ 新期に属する。

溝 0148 (図 16 - 59 ~ 70) 土師器、瓦器等が出土している。59 ~ 68 は土師器皿である。59 は皿 Sh で口径 6.8 cm、器高 1.6 cm を測る。60、61 は皿 N で 60 は口径 7.8 cm、器高 2.0 cm を測る。61 は口径 7.7 cm、器高 1.6 cm を測る。62 ~ 68 は皿 S で 62 は口径 9.4 cm、器高 2.1 cm を測る。63 は口径 11.6 cm、器高 2.1 cm を測る。64 は口径 13.8 cm、器高 2.0 cm を測る。65 は口径 14.0 cm、器高 2.3 cm を測る。66 は口径 14.2 cm、器高 2.4 cm を測る。67 は口径 14.5 cm、器高 2.0 cm を測る。68 は口径 14.7 cm、器高 2.7 cm を測る。69 は瓦器の羽釜で口径 18.1 cm、器高 11.4 cm を測る。70 は瓦器の火鉢である。脚部のみの出土で大きさは不明である。溝 0148 出土遺物は X 期古に属する。

土坑 0063 (図 17 - 71 ~ 79) 土師器を中心に灰釉陶器 (山茶碗)、焼締陶器等を検出した。71 ~ 77 は土師器皿である。71 は皿 Nr で口径 5.7 cm、器高 1.0 cm を測る。72 ~ 74 は皿 Sb で 72 は口径 9.3 cm、器高 1.9 cm を測る。73 は口径 9.5 cm、器高 2.2 cm を測る。74 は口径 9.8 cm、器高 2.0 cm を



71～79 土坑0063

80～82 落込み0180

83～88 土坑0164

89～93 土坑0231

図17 遺物実測図3 (1:4) 土坑0063・落込み0180・土坑0164・土坑0231

測る。75～77は皿Sで75は口径11.0cm、器高2.2cmを測る。76は口径12.0cm、器高2.5cmを測る。77は口径12.4cm、器高2.1cmを測る。78は灰釉陶器（山茶碗）の皿で口径は10.0cm、器高1.9cmを測る。79は焼締陶器の播鉢である。口径24.4cm、器高11.9cmを測る。土坑0063出土遺物はXI期古～中に属する。

土坑0180（図17-80～82）土師器、施釉陶器等が出土した。80は土師器皿Sで口径11.1cm、器高18cmを測る。81、82は施釉陶器で81は皿で口径9.6cm、器高2.1cmを測る。82は燈明皿で口径6.9cm、器高1.8cmを測る。土坑0180出土遺物はⅫ期中～新に属する。

土坑0164（図17-83～88）土師器、伏見人形等が出土した。83～87は土師器皿である。83～85は皿Nrである。口径は5cm台に収まる。86、87は皿Sで86は口径10.6cm、器高1.7cmを測る。87は口径10.9cm、器高2.0cmを測る。88は伏見人形である。土坑0164出土遺物はⅫ期新に属する。

土坑0231（図17-89～93）土師器、銭貨が出土した。89～93は土師器皿Nrである。口径は5cm台に収まる。器高1.0cm前後を測る。土坑0231出土遺物はⅫ期新に属する。

2. 瓦類（図18・19、図版16）

瓦の大半は4層、5層及び柵列2の柱穴0079・0111から出土している。以下に概要を報告する。94～98は軒丸瓦、99～109は軒平瓦、110は磚である。

瓦94

4層出土。複弁六弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当径13.7cm（推定）、中房径4.2cm、内区径9.7cm、周縁幅0.9cm、瓦当厚1.5cm、残存長10.0cmである。瓦当下半部は摩滅が激しい。子葉が大きく、蓮弁先端部は表現されず、間弁は無い。弁区と中房は圏線及びその外周に巡る沈線により区画される。蓮弁は肥厚するが中房は低く平坦で、1+6の蓮子を配する。弁区外周には太い圏線が巡り、外区に

は大振りな珠文が配される。瓦当下半端面及び瓦当裏面下半をヘラケズリ、上半をナデで調整し、丸瓦部凸面は縦及び横方向のヘラケズリで仕上げる。昭和62年度の平安宮内裏跡調査(87HK-LT)、平安京左京三条四坊十町(2003HK-RC002)、平安京右京三条一坊四町(2004HK-YU001)で同范品が出土している。

瓦 95

素弁八弁蓮華文緑釉軒丸瓦である。隣り合う蓮弁同士が重なるように表現されており、間弁は無い。蓮弁は平坦で薄く、やや肥厚する先端部から中房に向けて伸びる稜線によって弁端の返りを表現する。細い圈線で弁区と外区を区画し、外区には小振りの珠文を密に配する。周縁は幅3.4cmと広く、素文である。昭和56年度に実施された左京二条二坊九町高陽院の調査(81HK-ME)、昭和63年度の平安宮内裏跡調査(88HK-DB)、平成元年度の左京二条二坊十五町高陽院(89HK-MW)、平成16年度の小野瓦窯跡調査(2003RH-ON001)で同范品が出土しているが、何れも施釉はされておらず、周縁の幅は狭い。調査敷地内の表土で採集した。

瓦 96

柱穴0111出土。右巻きの二つ巴文軒丸瓦で、瓦当径12.2cm、内区径5.2cm、周縁幅1.5cm、瓦当厚1.8cm、残存長11.2cmである。巴頭部はやや尖り、太く伸びる尾部は互いの頭部に接触せず独立している。太い圈線によって内外区を画する。外区に大振りな珠文を配し、周縁は素文である。

瓦 97

柱穴0111出土。左巻きの二つ巴文軒丸瓦で、瓦当径11.4cm、内区径5.6cm、周縁幅1.0cm、瓦当厚1.3cmである。巴頭部は丸く、細い尾部が伸びる。外区に珠文を配し、周縁は素文である。丸瓦は瓦当裏面上端部に無加工で接合され、補填粘土も少量である。

瓦 98

柱穴0079出土。右巻きの三つ巴文軒丸瓦である。巴頭部は丸く、やや太めの尾部が伸びる。内外区を画する圈線は無く、外縁には珠文を配する。丸瓦は瓦当裏面上端部に無加工で接合される。

瓦 99

4層出土。均整唐草文軒平瓦である。折り曲げ段顎。圈線によって内外区を画し、上外区及び下外区に珠文を配する。瓦当両端部を欠損しているため、脇区については不明。瓦当面上端部に范の痕跡が残る。瓦当面成形時、顎部裏面及び下面に縄叩きを施す。

瓦 100

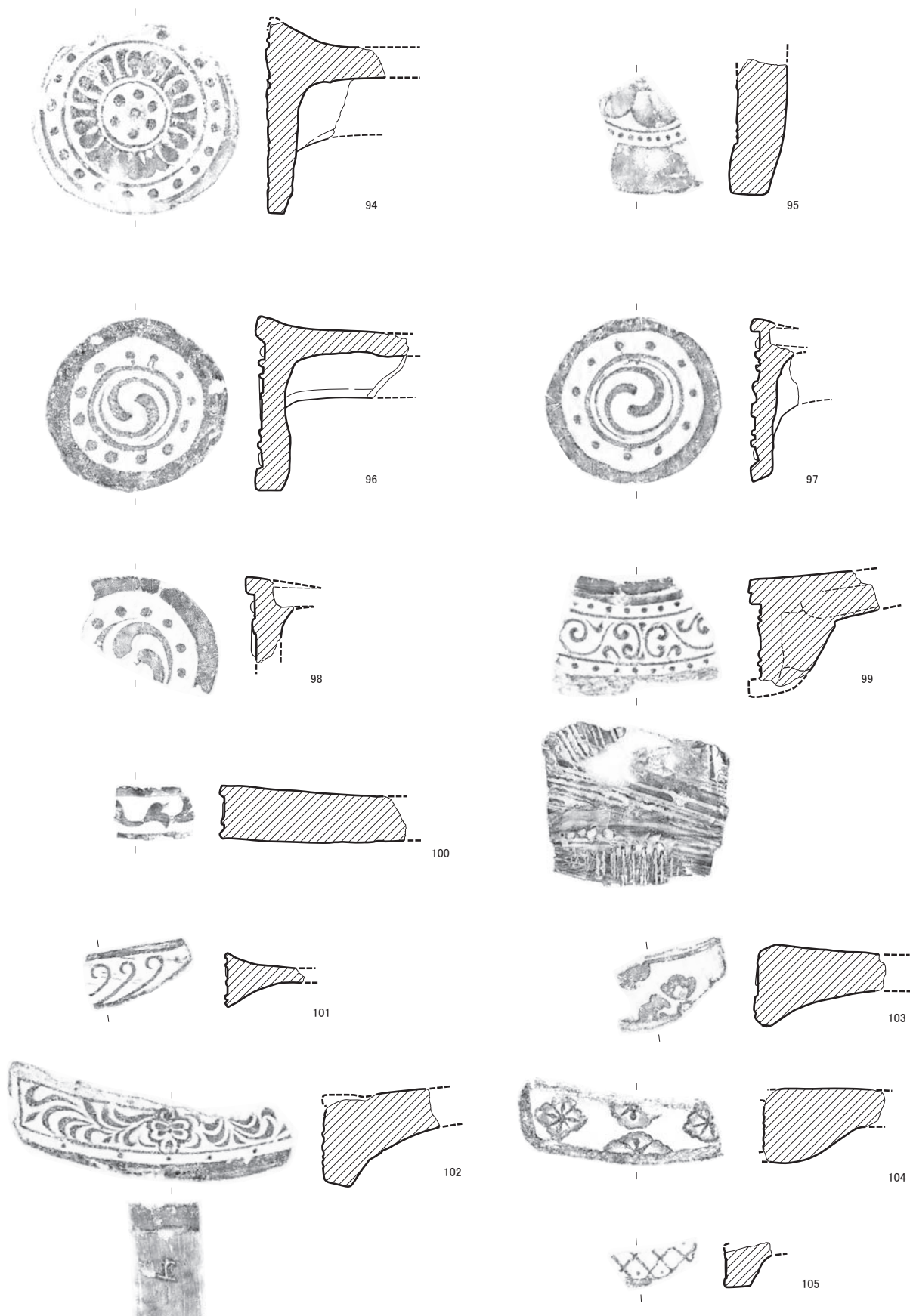
5層出土の唐草文軒平瓦で、外区は無い。直線顎。凹面は瓦当面から約5.0cmに横方向のナデを施し、布目を消す。凸面は瓦当面から約9.0cmの範囲に横方向のナデを施し、縄叩き痕を消す。

瓦 101

5層出土。唐草文軒平瓦である。曲線顎。凹面は縦方向、凸面は斜め方向のナデが施される。

瓦 102

4層出土の均整唐草文軒平瓦である。圈線によって内外区を区画し、上外区及び下外区に珠文を配する。脇区は無文である。顎部裏面から平瓦部側面凸面側にかけて2段階で大きく面取りする。



94、99、103 第4層 95 表採 96~97 柱穴0111
 98 柱穴0079 104 落込み0250 100~102、105 第5層

0 20 cm

図18 遺物実測図4 (1:4) 第4層・表採・柱穴0111・柱穴0079・落込み0250・第5層

摩滅が激しいため、凹面の調整は判別困難であるが、凸面には縦方向のナデを施す。凸面側の顎屈曲部に線刻が認められ、「丁」と読める。

瓦 103

5層から出土した半裁花文軒平瓦である。側面凹凸両面側端部及び瓦当凹面側端部をヘラケズリによって大きく面取りする。平瓦凹面は無調整で布目を明瞭に残し、凸面は縦方向のナデによって叩き痕を残さない。昭和56年度に実施された左京二条二坊九町高陽院の調査(81HK-ME)で同範と思われるものが出土している。

瓦 104

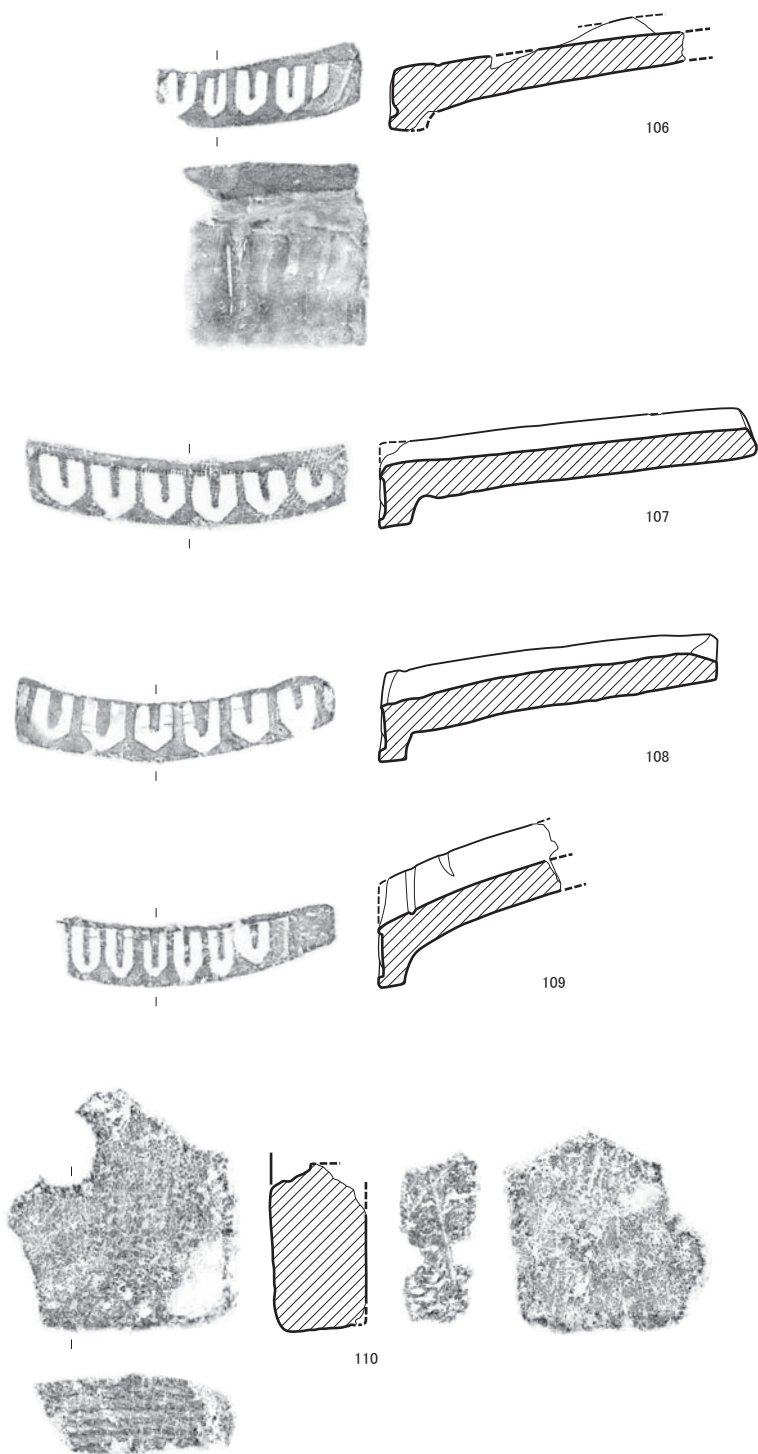
落込み0250から出土した半裁花文軒平瓦である。段顎。凹凸両面とも、横方向のナデを施すが、部分的に布目及び縄叩き痕を残す。昭和63年度の内裏調査(88HK-DB)で出土した軒平瓦の退化型式と思われる。

瓦 105

5層出土。斜格子文軒平瓦で、下周縁沿いの格子下端部に珠文を配する。折り曲げ段顎。昭和63年度の平安宮内裏跡調査(88HK-DB)で同文の軒平瓦が出土している。

瓦 106

4層から出土した陰刻剣頭文軒平瓦である。折り曲げ段顎。側面凹面側を浅く面取りする。凸面に縦方向のナデを施す、ヘラ記号らしき線刻が認められる。



106 第4層 107、109 柱穴0111
108 柱穴0079 110 落込み0250



図19 遺物実測図5 (1:4)
第4層・柱穴0111・柱穴0079・落込み0250

瓦 107

柱穴 0111 から出土した陰刻剣頭文軒平瓦の完形品である。全長 20.0 cm、全幅 17.0 cm、平瓦部の厚さ 1.7 cm、瓦当厚 3.3 cm。折り曲げ段顎。側面凹面側、瓦当面凹面側を浅く面取りする。凹凸面ともに無調整で、凹面には布目、凸面には縄叩き痕を残す。

瓦 108

柱穴 0079 から出土した陰刻剣頭文軒平瓦である。ほぼ完形品で、全長 17.9 cm、全幅 16.8 cm、平瓦部の厚さ 1.9 cm、瓦当厚 3.0 cm。折り曲げ段顎。側面凹面側及び狭端部凹面側を面取りし、凸面に縦方向のナデを施す。

瓦 109

柱穴 0111 から出土した陰刻剣頭文軒平瓦である。折り曲げ段顎。側面凹面側を僅かに面取りし、凸面に縦方向のナデを施す。

瓦 110

落込み 0250 から出土した磚である。残存長 13.0 cm、残存幅 12.6 cm、厚さ 5.1 cm。表裏両面、下側に縄叩き痕、右側に同心円の当て具痕が残る。中央部に径 4.2 cm の穿孔が施されるが、貫通はしていない。

第Ⅵ章 まとめ

今回の調査では、平安時代末期～江戸時代に至る、遺構を検出した。特に、高陽院の池跡とその池を埋め戻したと思われる土層が調査区全面で確認できたことが成果といえる。また、中世の遺構や油小路のものと思われる礫敷の路面等を検出できた。中世の遺構に関しては4層上面で検出したもので、年代的には13世紀前半と14世紀～16世紀前半を中心にしたものに分かれる。13世紀前半の遺構は柵列1条のみであるが、この遺構は後鳥羽上皇の院御所に関連するものと考えている。14世紀以降では井戸や溝、柱穴等があるが、ほとんどの遺構に切り合いはなく、井戸も中世のものは1基しか見つかっていない。下京と上京の境にある当地付近は、中世全般において、経済活動が乏しい地域であったものと思われ、これらは既往調査成果とも合致する。

高陽院に関するものとしては、調査を重ねることで今までよりも広い視野で成果をみることができるようになり、池を埋め戻したと思われる土層の認識や池汀部と池底の標高値からみえてくるものがあった。

今回の調査で確認できたことは以下の通りである。

1. 池底については、いわゆる「礫敷き」といわれるものである。池底全面が礫敷きの状況を呈していた。池底の標高は約40.5mで平坦であった。

2. 池底の上面に、灰色を呈する泥土（5層）が約10cm溜まっている。この泥土が池の埋土（以下、「池埋土」という）で、その上面には小さいながらも凹凸がみられた。また、この土層には全く腐食がみられなかった。

3. 池埋土の上層には、礫を多く含んだ褐色系の砂泥層（4層）が60～70cm堆積していた。この土（以下、「埋戻土」という）により、池は埋められたと考えている。この土層からは緑釉の鴟尾・瓦類・陶器、高坏、弥生土器や石包丁等が出土した。

4. 埋戻土上面では、13世紀前半と14世紀～16世紀前半にかけての遺構を検出した。4層上面の標高は約41.3mであった。4層及び4層上面の最古の遺構からは幡枝瓦窯産の陰刻剣頭文軒平瓦が出土している。

5. 油小路については、鎌倉時代のものは検出できなかった。

これらと、高陽院の既往調査での成果から次の5点について若干の考察をくわえてみたい。

1. 池底の構築法

今調査地の北側（7次調査）と南隣（10次調査）でも調査がなされており、どちらの調査でも池跡及び池底・池埋土・埋戻土が検出されている。両調査報告書に池底は「砂礫を敷いたもの」という記述がなされている。今調査でも同様に砂礫を敷いた池底を確認した。

この池底部分を断割り、断面観察すると地山面である砂礫層を掘り下げ粘土を貼り付けたような造作はなく、砂礫層上面が強めに褐色を帯びている程度で、層を分けるというところまではいかない（図20）。調査で池底を検出する際には、池埋土が剥がれるように取れ、容易に池底が検出できるほど池底は堅く固まっており、いわゆる「砂礫を敷いた」とものと捉えることができる。

これらの状況からは砂礫の地山面で粘土を貼るような人為的な造作を施したのではなく、砂礫のままの状況でもないが、池底表面は堅く締まっているといえる。池跡の調査をすれば、必ず池底上面に泥土の土層が薄いながらも溜まっている。今調査でも、泥土（池埋土）が池底に約10cm溜まっていた。池に水を配し一定期間その状況を保てば、泥土が池底に堆積すると理解できる。この作用を利用し、池を地山面の砂礫層まで掘り下げ、一旦池に水を入れ泥土（細かな粒子の泥）を堆積させることで、細かな泥の粒子が砂礫層の隙間に入り込み、隙間を埋めることで漏水しないものが出来るのではないかと考える。水を入れる際に粘土を砂礫層に置くことも想定される。池に水を入れこみ泥土が堆積してから一定期間置いた後、水を抜き表面の泥をある程度除去し、乾かすことで（池底面が空気に触れ酸化することで）より強固になるのではと推測する。自然の力を利用した池底造りだと考えられ、当地の地盤に合わせた工法と思われる。

2. 池埋土について

池埋土の断面観察から、上面は小さいながらも凸凹が観察される。これは埋戻土が投げ込まれるように埋め戻された圧力によって形成されたことが想定できる。また、埋戻土には礫が多く含まれるが、それが池埋土に食い込むほどではないことから、水抜きをして乾かした後に一気に埋め戻された結果だと推察できる。池埋土は灰色を呈する泥土であり、腐植を全く伴わないことから、池底まで清掃がある程度の頻度でなされていただろうこと、池に清浄な水が豊富に流れ込み、それに伴って池に流れが生じていただろうことが推測される。清浄な水ということから、西洞院大路にあったであろう川や堀川から邸宅内に水を導入したと考えるより、邸宅内に泉があり清浄で豊富な水が溢れ出ていたと考えるほうが適切と思われる。『栄花物語』に高陽院で催された長元八年五月十六日の「高陽院歌合」の様子を記した中に「いづみのうへの渡殿に」とあることで泉があったことが知れる。高陽院にはかなりの数の泉の存在が想定できる。池埋土から出土した遺物の年代は平安時代末期～鎌倉時代初期と思われ、この時期の泉の位置は地形的にみても、標高値の高い高陽院の北東部にあったと推測できる。これは、後鳥羽上皇が名泉を好み、高陽院を院御所とする際の決め手にもなっているようで、そうだとすれば院御所が

池埋土の断面観察から、上面は小さいながらも凸凹が観察される。これは埋戻土が投げ込まれるように埋め戻された圧力によって形成されたことが想定できる。また、埋戻土には礫が多く含まれるが、それが池埋土に食い込むほどではないことから、水抜きをして乾かした後に一気に埋め戻された結果だと推察できる。池埋土は灰色を呈する泥土であり、腐植を全く伴わないことから、池底まで清掃がある程度の頻度でなされていただろうこと、池に清浄な水が豊富に流れ込み、それに伴って池に流れが生じていただろうことが推測される。清浄な水ということから、西洞院大路にあったであろう川や堀川から邸宅内に水を導入したと考えるより、邸宅内に泉があり清浄で豊富な水が溢れ出ていたと考えるほうが適切と思われる。『栄花物語』に高陽院で催された長元八年五月十六日の「高陽院歌合」の様子を記した中に「いづみのうへの渡殿に」とあることで泉があったことが知れる。高陽院にはかなりの数の泉の存在が想定できる。池埋土から出土した遺物の年代は平安時代末期～鎌倉時代初期と思われ、この時期の泉の位置は地形的にみても、標高値の高い高陽院の北東部にあったと推測できる。これは、後鳥羽上皇が名泉を好み、高陽院を院御所とする際の決め手にもなっているようで、そうだとすれば院御所が

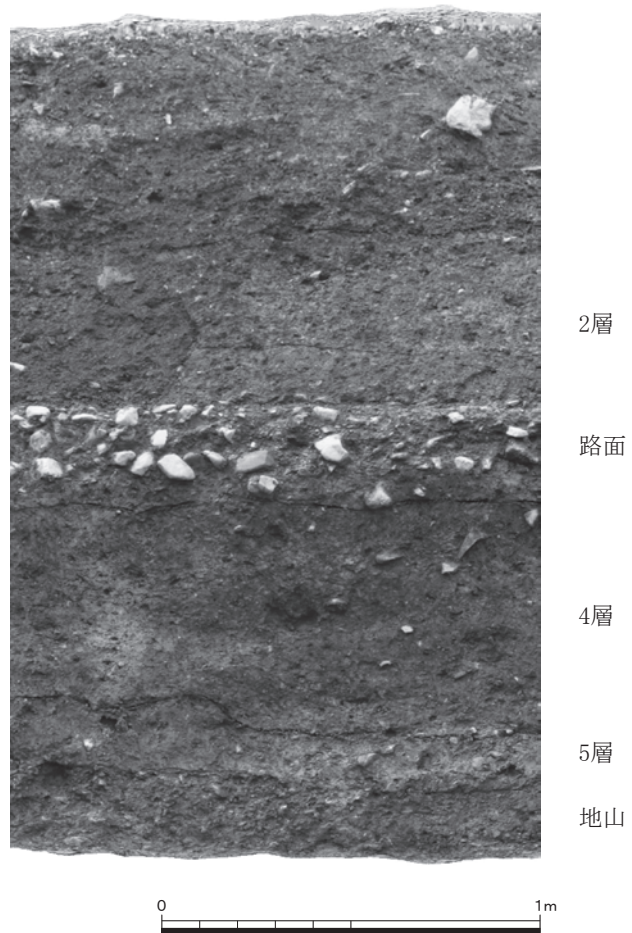


図20 2区西壁断面写真(1:20)

十五・十六町になることから泉の位置が標高の高い十六町にあったと考えられる。

3. 池汀部と池底標高値の問題

高陽院の池については、1次調査で検出した池（池A）が南西・南東部に広がり、9次調査で池南端の汀を検出しており南北幅が約140mと推測され、東西幅も同程度と認識されている。その他に丸太町通の北側に面した小川通西側での5次調査で検出された池は池Aの標高より0.6～1.0m高いとされており、別の池（池B）と認識されている。

2005年に実施された高陽院南西隅の9次調査報告書のまとめには、「これまでに高陽院西半部で検出されている池の汀の標高は40.4～40.5mであり、今回の池の汀の標高もこれと一致している」とあり、1次調査でのSG1-B期の州浜を含めた高陽院西半で検出された池汀の標高が40.4～40.5mであると指摘されている。また、ここでの池底は断面図より計測する限り標高は40.0m前後と思われる。

一方、現油小路より東側の5・7・10・11次調査では、池の汀は5次調査の1箇所のみ出土で1次調査の池より0.6～1.0m標高が高い池であることが分かっている。池底の標高は7・10・11次調査の3箇所を確認されており、その標高値は7・11次調査で約40.5m、10次は40.3～40.5mである。これらから、現油小路より東で出土している池底の標高値と高陽院西半の池汀の標高値がほぼ同じであることが知れる。池底も西半南端とされる辺りは標高約40.0mで0.5m程低くなっている。従来、7・10・11次調査で出土した池も高陽院の南西部に広がる池（池A）との認識がなされているが、池汀と池底の標高が同じであって、尚且つどれも同じ池ということがいえるのかという疑問が湧いてくる。現地地形からみても（図21）、丸太町通と油小路通の交差点（春日小路と油小路）南側で標高は43.11m、竹屋町通と東堀川通の交差点（大炊御門大路と堀川小路）東側で標高は40.80mであること^{注1}から、高陽院西南隅の町である左京二条二坊十町の北東隅と南西隅では2.31mの標高差がある。平安時代後期段階での地形がどうだったかは不明であるが、現況地形が古くからの地形をある程度継承されていると考えれば、2m以上の比高差があったと思われる。これだけの比高差がある中で、一つの大きな池を構築し維持することが可能であったのかも考えていく必要がある。

頼通が造営した当初の高陽院池庭の景観は、『栄花物語』『駒競の行幸』巻に次のように記されている。

『この世には冷泉院、京極殿などをぞ人おもしろき所と思いたるに、この高陽院殿の有様、この世のことと見えず、海竜王の家などこそ、四季は四方に見ゆれ、この殿はそれに劣らぬさまなり、例の人の家造りなどにも違ひたり。寝殿の北、南、西、東などには皆池あり。中島に釣殿建てさせたまへり。東の対をやがて馬場の御殿にせさせたまひて、その前に北南さまに馬場せさせたまひり』

寝殿の北、南、西、東に池があることが記されており、東の対が馬場殿として利用され、その東側に南北方向に馬場があったことが分かる。池が馬場にまでは広がっていないと思われ、馬場殿の南側、馬場の西側までが池と想定すれば、十五町の南西部に該当することになり、今調査及び7・10次調査で見つかっている池が東池になるという想定も可能で、高陽院西半部の池とは別の池と

することもできる。従来から推定されている「敷地の南西に広大な池」が一つの池であると決めつけるのではなく、もう少し調査の成果を積み重ねていく努力が重要と考える。

また、西半部の6次調査では池底標高が40.5mと高いことが確認されている。1次及び9次調査では、池の修復が4回（いずれもA～D期としている）なされていることが確認されており、修復ごとに汀部や池底の位置が変わるとともに標高値も変わっている。古いものを埋め、そして新しいものを構築することで徐々に標高値が上がる傾向にある。高陽院の創建から3期（回）目の再建までは40年間という短い期間であり、1～3期を出土遺物から分けることが可能かどうか不明な要素もあるが、検出された池汀部や池底が高陽院庭園のどの修復時期に対応するのかも再検討が必要であろう。

最後に、油小路東側の池底の標高は40.5m前後であり、ほぼ平坦で安定している。高陽院の池は浅く水深50cm程度だと推測されており、舟を安全に浮かせ利用するためには池底の平坦性はかなり重要なものだったと思われる。

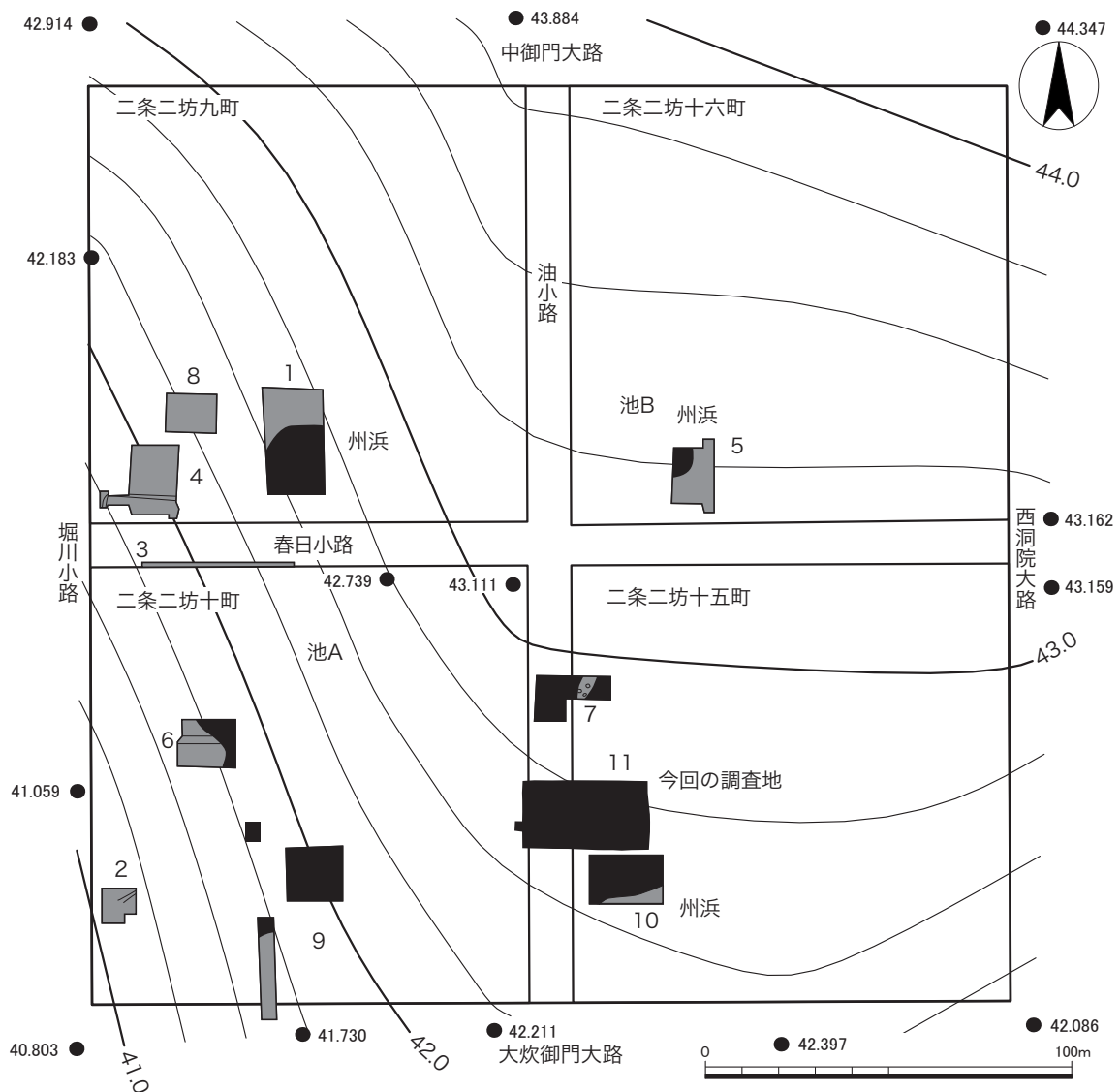


図21 高陽院調査地周辺コンタ図 (1:2,000)

表5 高陽院池関連の標高値データ

	調査位置 調査回数	調査の種類	陸部・池底の標高値	備考
1	左京二条二坊九町 (高陽院1次調査)	発掘	SG1 - A 州浜 H 40.55 m	
			SG1 - A 池底 H 40.0 m	
			SG1 - B 州浜 H 40.9 m	
			SG1 - B 池底 H 40.3 m	
			SG1 - C 州浜 H 41.1 m	
			SG1 - C 池底 H 40.4 m	
			SG1 - D 州浜 H 41.1 m	
			SG1 - D 池底 H 40.4 m	
			埋戻土上 H 41.8 m	
2	左京二条二坊十町 (高陽院2次調査)	立会		
3	左京二条二坊十町 (高陽院3次調査)	立会	池底 H 40.5 ~ 40.6 m	報告の記述から1次調査SG1 - C期以降の池だと思われる。池埋土の上層は黒褐色泥砂層が埋戻土の可能性あり。
			埋戻土上 H 40.9 m ?	
4	左京二条二坊九町 (高陽院4次調査)	発掘	陸部 H 40.9 m	
			埋戻土上 H 41.1 m	
5	左京二条二坊十六町 (高陽院5次調査)	発掘	池1 陸部 H 41.7 m	立会調査にて庭園遺構が確認され発掘調査に切り替わる。そのため、埋戻土については不明である。
			池1 池底 H 41.3 m	
			池2 陸部 H 41.4 m	
			池2 池底 H 41.0 m	
6	左京二条二坊十町 (高陽院6次調査)	発掘	池底 H 40.5 m	立会調査から発掘調査に移行。上層が掘削されていたため埋戻土は確認できるが掘削され、最上標高は不明
			陸部 H 40.9 m	
			埋戻土上 H 40.9 m ?	
7	左京二条二坊十五町 (高陽院7次調査)	発掘	池底 H 40.5 m	基壇地業がなされており、その上に埋戻土がある。
			基壇上面 H 41.5 m	
			埋戻土上 H 41.7 m	
8	左京二条二坊九町 (高陽院8次調査)	発掘	A期陸部 H 40.9 m	庭園遺構面まで掘削がなされた後に発掘調査をしているため、上層については不明で、埋戻土確認できるが掘削され、最上標高は不明
			池底 H 40.3 m	
			C期陸部 H 41.25 m	
			埋戻土上 H 40.9 m ?	
9	左京二条二坊十町 (高陽院9次調査)	発掘	池D 陸部 H 40.7 m	
			池D 池底 H 40.3 m	
			池C 陸部 H 40.6 m	
			池C 池底 H 40.05 m	
			池B 陸部 H 40.6 m	
			池B 池底 H ? m	
			池A 陸部 H 40.4 m	
			池A 池底 H 40.2 m ?	
埋戻土上 H 41.3 m				
10	左京二条二坊十五町 (高陽院10次調査)	立会	池底 H 40.3 ~ 40.5 m	埋戻土については、攪乱等で削平があり、最上標高は不明
			埋戻土上 H 41.0 m	
11	左京二条二坊十五町 (高陽院11次調査)	発掘	池底 H 40.5 m	
			埋戻土上 H 41.3 m	

4. 埋戻土について

埋戻土からは、弥生時代～鎌倉時代初期の様々な器種・器形の遺物が出土している。土器類はいずれも圧力がかかったためか細かな破片が多かった。また、遺物だけではなく礫がかなり多く含まれていた。

9次調査報告書のまとめで「この池は鎌倉時代に多量の礫を含む土砂で埋められていたが、こ

の廃絶時期もこれまでの調査で確認されている事実と一致し、池が平安時代のうちは存続し、鎌倉時代に人為的に埋め戻されたことを改めて確認できた。」とされ、9次調査でも、池が人為的に埋め戻されたと確認されている。また、「これまでの調査で確認されている事実と一致」とあることから、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所で実施された高陽院の発掘調査資料を拝見させていただいたところ、今調査での埋戻土と同様の褐色系の砂泥で礫を含む土層堆積が、1・3・4・6・7・8・9・10次調査でも確認することができた。十五町だけでなく九・十町でも同様に埋め戻しがなされており、少なくとも高陽院北西から南半部が埋められていた。

一方、十六町内の調査は5次調査のみで、その調査は工事中に庭園遺構がみつきり、急遽発掘調査をされたもので、調査時には遺構面まで重機掘削がなされており、埋め戻した土層があったかどうかは不明である。但し、調査では高陽院の庭園に使われた景石が原位置を保ったままで残存していた事実がある。それも1トンを超えるような巨石を含め5石が残存していた。一般的に考えれば、高陽院の庭園に使われるような立派な景石は再利用するために抜き取られることが普通であり、抜き取られずに残っていたということは、ここでも庭園に手をつけずに埋め戻しがなされていたという証拠になるのではないかと考えている。1次調査では池SG 1 - D期で池の内外に原位置を保ったチャート質の景石が2石残存しており、その景石を埋戻土が覆っていたことも確認した。

各調査で確認された埋戻土上面の標高は上部があまり削平を受けていないと思われる、1次調査で41.8m、7次調査で41.7m、9次調査で41.3m、今調査で41.3mであり(表5)、池の陸部の標高値よりもかなり高いことがわかる。また、1・5次調査の陸部で出土した景石が手を付けられずに原位置を保ったままの状態出土したことを含め、池が埋め戻されただけでなく、高陽院全体を覆うようにすっぽりと埋められた、俗にいう「埋め殺し」されたという状況が確認できた。

また、高陽院全体を一気に埋めるためには、相当量(池だけでも約10,000m³)の土砂を確保する必要があり、それも高陽院に近い場所で用意する必要があったと思われる。高陽院が埋戻されたと推定する時期は、平安宮のあった内野が荒廃しており且つ高陽院から比較的距離に近い場所である。そこから土砂を運び込んで埋戻した可能性が高いと思われる。埋戻土からは緑釉の瓦類、緑釉陶器や灰釉陶器、高坏等や弥生土器・石包丁も出土していることから、埋戻土の搬出先は平安宮内で弥生時代の遺跡があった場所と言えるのではないだろうか。そして埋め戻した時期は院御所が完成する1205年よりも少し前だと思われる。文献からは油小路を利用して西門から院御所に入る記事^{注2}や院御所内には建物が六十字や百宇^{注3}というような膨大な数の建築物が見えることは、院御所を造営する前に、油小路を施工することや多くの建物が建てられるスペース(敷地)を確保することが院御所を造営する前提条件となろう。そしてそれは、院御所造営事業と一体の作業であり、埋め戻すことがその最初の造成工事と考えられる。4層及び4層上面で検出した一番古い遺構から幡枝瓦窯産の陰刻剣頭文軒平瓦が出土していることや5層及び4層から出土した他の出土遺物の年代からもそれを支持しているように思われる。

5. 油小路について

高陽院の既往調査で平安京条坊データから油小路の推定位置にあたる調査は7次調査のみであり、その調査では道路遺構は見つかっていない。

今調査区の西半は、平安京条坊データによる油小路の推定位置にあたり道路幅全体を検出できるものと思っていたが7次調査同様、鎌倉時代の道路遺構は検出できなかった。

高陽院造営に際し、宅地部分に取りこまれた春日小路・油小路は廃されたと考えられるが、1205年後鳥羽上皇による院御所造営時に宅地が二町四方から南北二町に縮小されて、院御所の敷地は平安京左京二条二坊十五・十六町となることから、油小路は再設されたと考えられる。それは文献上に見えることから推測できる。再設されたであろう油小路は平安京の条坊推定位置でのものと考えられるが埋戻土上面では、一条の南北溝（溝0148）を検出したにとどまった。この溝も出土遺物から15世紀後半～16世紀前半のものと思われる。この溝の位置は条坊データからみれば、油小路中央やや西側にあることから、検出当初は西側溝という認識で調査をし、東側溝の検出に努めたが、結局は検出できなかった。また、この溝の西側で溝を埋めた整地層に伴う礫敷路面を検出したことから、溝より新しい時期の油小路が現況位置近くまで移動している状況が認められた。このことから、溝は油小路東側溝という可能性も出てきた。

前述のように調査区西端で路面を検出した。この路面は礫敷きでかなり強固に搗き固められたもので油小路路面と思われる。位置的には現油小路より少し東に位置し、推定油小路西築地辺りにある。層的には17世紀中頃より古く16世紀前半よりも新しいものとしかいかえず、路面の造りが丁寧で強固であることから、かなりの事業であり、安定した政権での造作と考えられる。候補としては京都改造を断行した豊臣秀吉もしくは二条城築造を行った徳川幕府初期のものとする。

また、路面上には継続した路面の痕跡はなく、江戸時代中期以降の整地層が堆積する（図20）。調査区内でも江戸時代中期以降の道路を示す痕跡がないことから、現油小路下に移動したものである。油小路が中世、近世、近代に至る過程で徐々に西側に移動していく姿が見て取れる。

以上、今調査の成果や高陽院の既往調査から考察を試みた。推測の域をでないものもあるが、問題提起としてみていただければ幸いである。調査成果からは従来の見解を補強するものが大半であったが、高陽院の華やかな部分からではなく廃絶からの視点で見た時に今までと違う高陽院の姿が少し見えてきたように思われる。反対に高陽院西半部6次調査の池底は現油小路東側の7・10・11次調査の池底標高と同じであることが、どのような原因で生じたのか？池がどのように存在していたのか、そしてそれは何に起因するものなのか等にも繋がっていくものでもある。また、7次調査で見ついている池の中で地業を施して建物を造営しているものは、どのような建物でいつ頃に建てられたものなのかも詳細は不明である。1次調査や9次調査で確認したように庭園の大きな修復が4回確認されているがその時期は高陽院の焼失に伴う再建時と合うのか？また、高陽院廃絶後には油小路が再設されたと思われるが、見つけることが出来ていない。このように高陽院ではまだまだ不明な点も多くあり、様々な視点から見直すことが必要と思われる。幸いにも強固にすっぽりと「埋め殺し」された高陽院は、そのために遺跡の保存状況が大変良好である。

今後の継続した調査の進展とその成果を待ちたい。

注

注1 国土交通省が公開している街区基準点等及び都市官基準点の補助点（4級公共基準点相当）による。

図21のコンタもそのデータを使用し作成した。

注2 4ページ注3と同じ

注3 4ページ注2・4と同じ

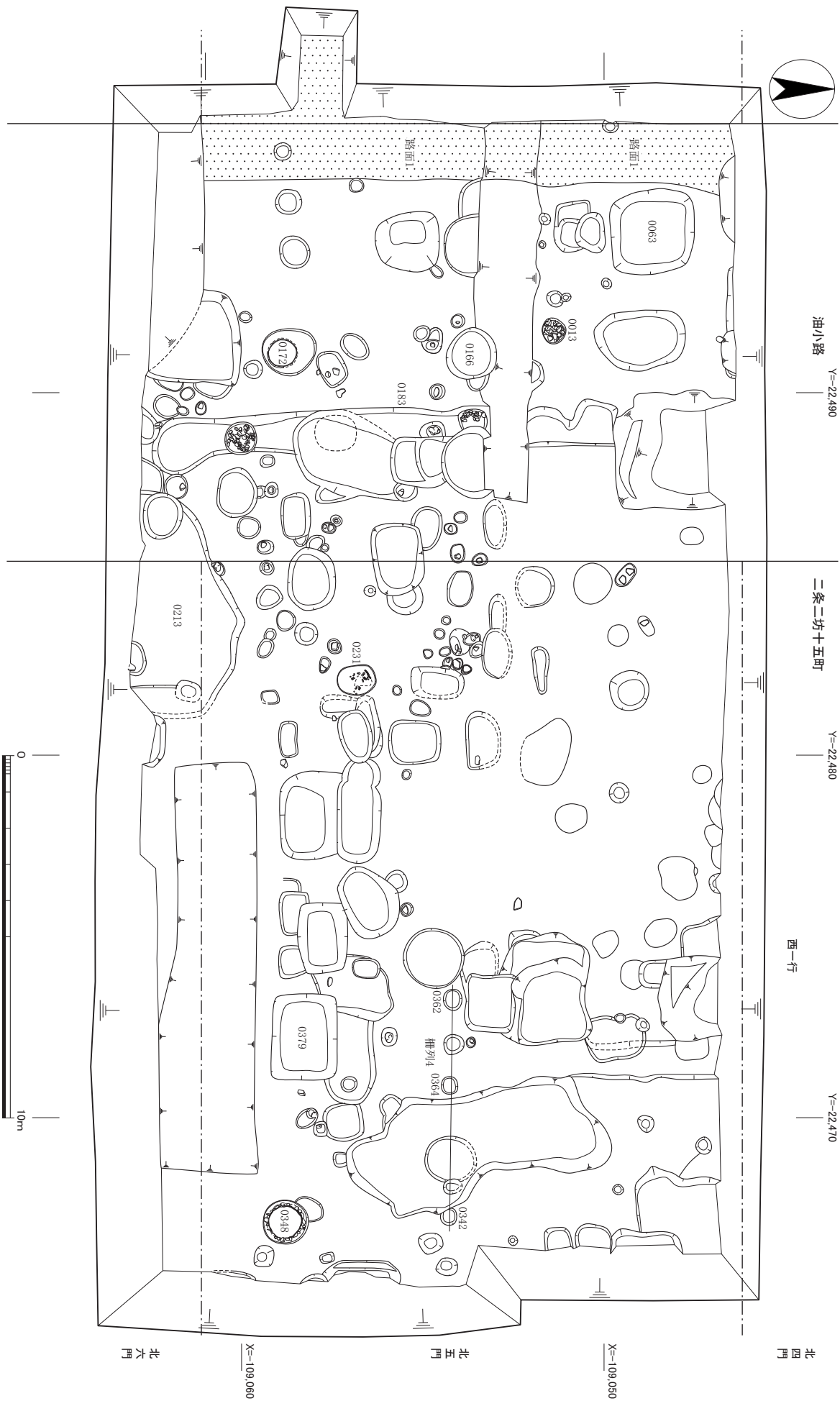
表6 遺物観察表

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿	5層	9.9	(1.3)		10YR8/2 灰白	
2	土師器	皿	5層	10.3	(1.2)		5YR8/4 淡橙	
3	土師器	皿	5層	11.7	(1.3)		7.5YR8/3 浅黄橙	
4	土師器	皿	5層	11.7	(1.6)		2.5Y7/2 灰黄	
5	土師器	皿	5層	12.4	(1.3)		7.5YR8/6 浅黄橙	
6	土師器	皿	5層	13.6	(2.9)		10YR8/2 灰白	
7	土師器	皿	5層		(1.6)		10YR8/2 灰白	
8	土師器	高坏	5層		(12.2)		7.5YR8/4 浅黄橙	
9	須恵器	蓋	5層		(1.2)		N5/0 灰	
10	土師器	皿	4層	10.9	1.4		10YR7/2 にぶい黄橙	
11	土師器	皿	4層	10.8	1.5		7.5YR7/6 橙	
12	土師器	皿	4層	14.8	2.6		7.5YR7/3 にぶい橙	
13	土師器	皿	4層	14.8	(2.1)		7.5YR8/3 浅黄橙	
14	土師器	皿	4層	15.6	(2.4)		10YR7/3 にぶい黄橙	
15	土師器	皿	4層	15.7	2.3		7.5YR7/4 にぶい橙	
16	白色土器	椀	4層	16.8	(3.0)		2.5Y8/1 灰白	
17	白色土器	高坏	4層		(17.2)		2.5Y8/2 灰白	
18	瓦器	皿	4層	7.8	1.3		N4/0 灰	
19	瓦器	羽釜	4層		(6.6)		N3/0 暗灰	
20	瓦器	羽釜	4層	(残存長) 8	(残存幅) 2.3	(厚) 1.8	N4/0 灰	
21	須恵器	坏	4層	12.3	3.7	9.0	5Y7/1 灰白	
22	須恵器	椀	4層	16.1	4.3	7.4	2.5Y6/1 黄灰	
23	須恵器	鉢	4層	18.6	(4.6)		N5/0 灰	
24	須恵器	鉢	4層	22.8	(7.2)		N5/0 灰	
25	灰釉陶器	椀	4層	12.4	3.4	6.2	7.5YR8/1 灰白	
26	灰釉陶器	椀	4層		(1.5)	7.8	2.5Y8/1 灰白	底部外面に墨痕
27	灰釉陶器	椀	4層	15.1	5.2	7.4	N8/0 灰白	
28	緑釉陶器	皿	4層	10.4	2.3	5.8	5Y6/1 灰 釉：若草	
29	緑釉陶器	椀	4層		(3.2)	8.0	N5/0 灰 釉：濃緑	
30	青磁	椀	4層		(3.2)	5.8	10YR7/2 にぶい黄橙 釉：2.5Y6/2 灰黄	
31	土師器	皿	溝 0383	7.2	1.8		2.5Y8/2 灰白	
32	土師器	皿	溝 0383	7.2	2.2		7.5YR7/4 にぶい橙	

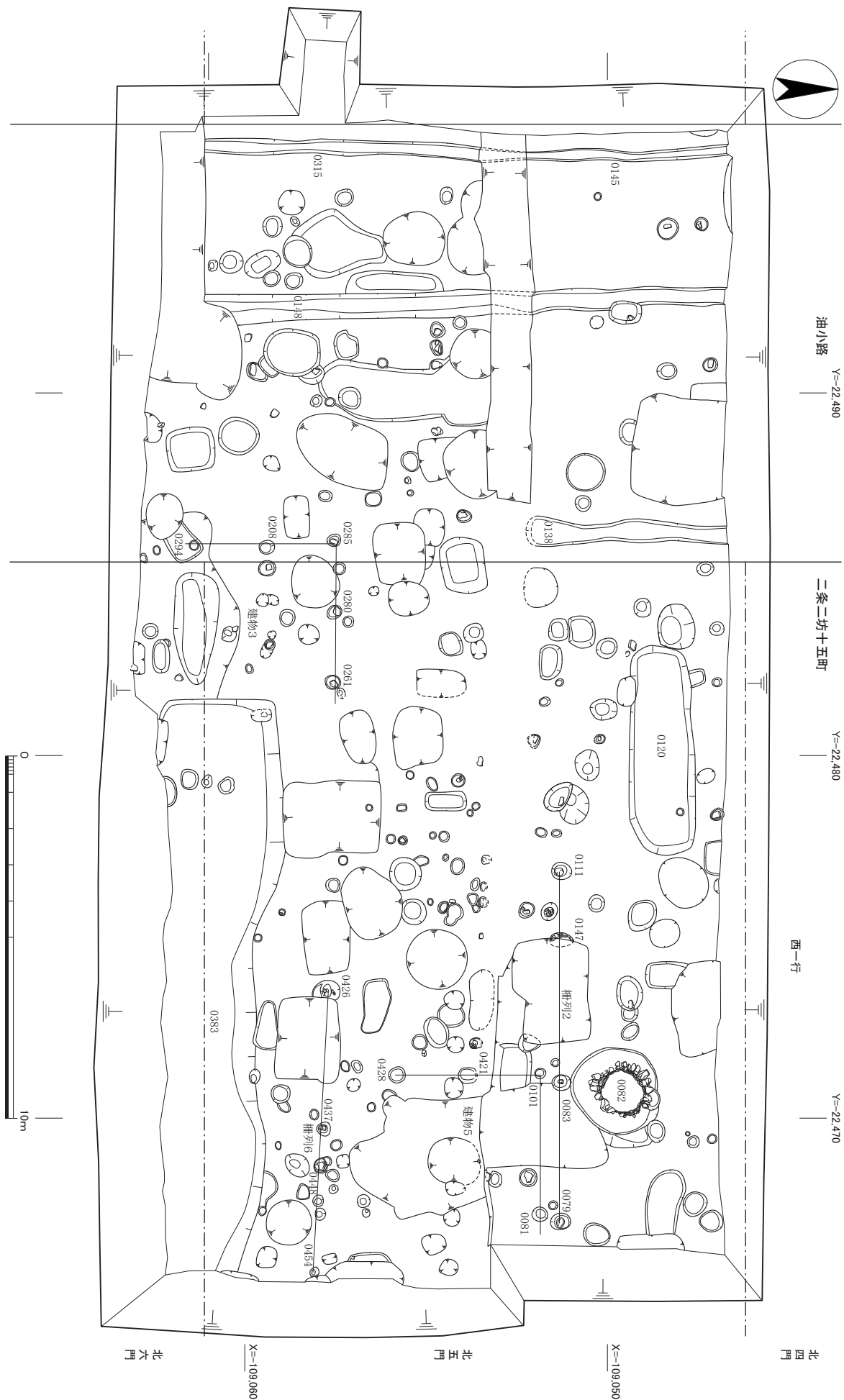
掲載 番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
33	土師器	皿	溝 0383	11.2	2.3		5YR7/8 橙	
34	土師器	皿	溝 0383	11.8	2.1		5YR7/4 にぶい橙	
35	土師器	皿	溝 0383	11.6	3.0		10YR8/1 灰白	
36	施釉陶器	おろし皿	溝 0383	14.8	4.6		10YR7/2 にぶい黄橙 釉：7.5Y6/2 灰オリーブ	
37	灰釉陶器	皿	溝 0383	5.6	2.2	3.8	10YR7/1 灰白	輪花状
38	青白磁	合子身	溝 0383	5.0	2.1	4.6	N8/0 灰白 釉：7.5GY8/1 明緑灰	陽刻文
39	瓦器	ミニチュア 羽釜	溝 0383	5.4	1.8		10YR8/3 浅黄橙	
40	瓦器	羽釜	溝 0383	18.0	(8.2)		2.5Y7/2 灰黄	
41	瓦器	鍋	溝 0383	30.2	(14.1)		2.5Y6/1 黄灰	
42	焼締陶器	甕	溝 0383		(9.2)		10YR4/1 褐灰	
43	石製品	石鍋	溝 0383		(4.9)			滑石製
44	須恵器	猿面硯	溝 0383	(残存長) 11.4	(残存幅) 6.9	(厚) 2.3	N5/0 灰	
45	土師器	皿	落込み 0239	7.9	1.5		10YR7/3 にぶい黄橙	
46	土師器	皿	落込み 0239	11.3	2.7		10YR6/4 にぶい黄橙	
47	土師器	皿	落込み 0239	11.3	2.9		10YR8/1 灰白	
48	土師器	皿	落込み 0239	11.4	(2.8)		10YR8/2 灰白	
49	土師器	皿	落込み 0239	11.9	(2.9)		2.5Y8/2 灰白	
50	瓦器	鍋	落込み 0239	26.0	(6.8)		N3/0 暗灰	
51	土師器	皿	井戸 0082 (枠内)	6.9	1.9		10YR8/3 浅黄橙	
52	土師器	皿	井戸 0082 (枠内)	7.6	1.6		10YR8/3 浅黄橙	
53	土師器	皿	井戸 0082 (掘方)	8.4	1.5		2.5Y8/2 灰白	
54	土師器	皿	井戸 0082 (枠内)	12.6	(1.7)		7.5YR8/2 灰白	
55	瓦器	羽釜	井戸 0082 (枠内)	18.4	(6.4)		N3/0 暗灰	
56	瓦器	火鉢	井戸 0082 (枠内)		(9.4)		N3/0 暗灰	
57	焼締陶器	播鉢	井戸 0082 (枠内)		(6.8)		5YR4/2 灰褐	
58	焼締陶器	播鉢	井戸 0082 (掘方)		(5.8)		5YR5/4 にぶい赤褐	
59	土師器	皿	溝 0148	6.8	1.6		7.5YR7/4 にぶい橙	
60	土師器	皿	溝 0148	7.8	2.0		10YR6/2 灰黄褐	
61	土師器	皿	溝 0148	7.7	1.6		10YR7/3 にぶい黄橙	
62	土師器	皿	溝 0148	9.4	2.1		7.5YR6/3 にぶい褐	
63	土師器	皿	溝 0148	11.6	2.1		7.5YR8/6 浅黄橙	
64	土師器	皿	溝 0148	13.8	2.0		7.5YR7/4 にぶい橙	
65	土師器	皿	溝 0148	14.0	2.3		7.5YR8/6 浅黄橙	
66	土師器	皿	溝 0148	14.2	2.4		7.5YR8/4 浅黄橙	
67	土師器	皿	溝 0148	14.5	2.0		7.5YR7/4 にぶい橙	
68	土師器	皿	溝 0148	14.7	(2.7)		7.5YR8/4 浅黄橙	
69	瓦器	羽釜	溝 0148	18.1	11.4		2.5Y5/2 暗灰黄	
70	瓦器	火鉢	溝 0148		(9.7)		N3/0 暗灰	
71	土師器	皿	土坑 0063	5.7			7.5YR7/4 にぶい橙	

掲載 番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
72	土師器	皿	土坑 0063	9.3	1.9		7.5YR7/4 にぶい橙	煤付着
73	土師器	皿	土坑 0063	9.5	2.2		10YR6/3 にぶい黄橙	煤付着
74	土師器	皿	土坑 0063	9.8	2.0		10YR7/3 にぶい黄橙	煤付着
75	土師器	皿	土坑 0063	11.0	2.2		7.5YR7/3 にぶい橙	煤付着
76	土師器	皿	土坑 0063	12.0	2.5		7.5YR7/4 にぶい橙	
77	土師器	皿	土坑 0063	12.4	2.1		7.5YR7/4 にぶい橙	煤付着
78	灰釉陶器	皿	土坑 0063	10.0	1.9	5.2	2.5Y8/2 灰白 釉：5Y7/4 浅黄	
79	焼締陶器	播鉢	土坑 0063	24.4	11.9	11.7	2.5YR6/6 橙	
80	土師器	皿	土坑 0180	11.1	1.8		10YR8/3 浅黄橙	
81	施釉陶器	皿	土坑 0180	9.6	2.1		5YR7/6 橙 釉：5YR5/8 明赤褐	
82	施釉陶器	燈明皿	土坑 0180	6.9	1.8	3.1	2.5Y7/3 浅黄 釉：5Y6/2 灰オリーブ	
83	土師器	皿	土坑 0164	5.1	1.0		7.5YR7/4 にぶい橙	
84	土師器	皿	土坑 0164	5.6	1.1		7.5YR7/4 にぶい橙	
85	土師器	皿	土坑 0164	5.9	1.2		7.5YR7/4 にぶい橙	
86	土師器	皿	土坑 0164	10.6	1.7		5YR6/6 橙	
87	土師器	皿	土坑 0164	10.9	2.0		7.5YR7/4 にぶい橙	
88	土製品	伏見人形	土坑 0164	(残存高) 6.2	(幅) 5.0	(奥行) 3.2	5YR7/3 にぶい橙	表面に雲母付着
89	土師器	皿	土坑 0231	5.9	1.4		2.5Y6/2 灰黄	
90	土師器	皿	土坑 0231	5.2	1.2		10YR6/3 にぶい黄橙	煤付着
91	土師器	皿	土坑 0231	5.0	0.9		10YR7/3 にぶい黄橙	煤付着
92	土師器	皿	土坑 0231	5.3	1.2		10YR6/3 にぶい黄橙	
93	土師器	皿	土坑 0231	5.2	1.3		10YR6/2 灰黄褐	煤付着
94	瓦	軒丸瓦	4層	(瓦当径) 13.7	(残存長) 10.0		N4/0 灰	
95	瓦	軒丸瓦 (緑 釉瓦)	表採		(残存長) 4.1		10YR8/3 浅黄橙 釉：10Y4/2 オリーブ灰	
96	瓦	軒丸瓦	柱穴 0111	(瓦当径) 12.2	(長) 11.2		10YR8/4 浅黄橙	
97	瓦	軒丸瓦	柱穴 0111	(瓦当径) 11.4	(残存長) 3.4	(瓦当厚) 1.3	N3/0 暗灰	
98	瓦	軒丸瓦	柱穴 0079		(残存長) 3.4		10YR7/3 にぶい黄橙	
99	瓦	軒平瓦	4層		(残存長) 8.9	(瓦当残存幅) 13.1	N4/0 灰	
100	瓦	軒平瓦	5層		(残存長) 13.2	(瓦当残存幅) 5.9	N4/0 灰	
101	瓦	軒平瓦	5層		(残存長) 5.9	(瓦当残存幅) 7.6	N4/0 灰	
102	瓦	軒平瓦	4層		(残存長) 10.9	(瓦当残存幅) 21.3	N4/0 灰	側面に「丁」の 線刻有
103	瓦	軒平瓦	5層	(瓦当厚) 5.3	(残存長) 9.9	(瓦当残存幅) 10.1	10YR7/2 にぶい黄橙	側面に2ヶ所切 り込み(線刻?) 有
104	瓦	軒平瓦	落込み 0250		(残存長) 8.8	(瓦当残存幅) 14.5	N3/0 暗灰	
105	瓦	軒平瓦	5層		(残存長) 3.6	(瓦当残存幅) 6.1	10YR7/2 にぶい黄橙	
106	瓦	軒平瓦	4層	(平瓦部幅) 17.0	(残存長) 16.4	(瓦当残存幅) 11.7	N5/0 灰	
107	瓦	軒平瓦	柱穴 0111	(瓦当厚) 3.3	(長) 20.0	(瓦当幅) 17.0	N4/0 灰	
108	瓦	軒平瓦	柱穴 0079	(瓦当厚) 3.0	(長) 17.9	(瓦当幅) 16.8	N5/0 灰	
109	瓦	軒平瓦	柱穴 0111	(瓦当厚) 3.1	(残存長) 10.6	(瓦当残存幅) 16.5	10YR8/2 灰白	
110	瓦	磚	落込み 0250	(厚) 5.1	(残存長) 13.0	(残存幅) 12.6	7.5Y5/1 灰	

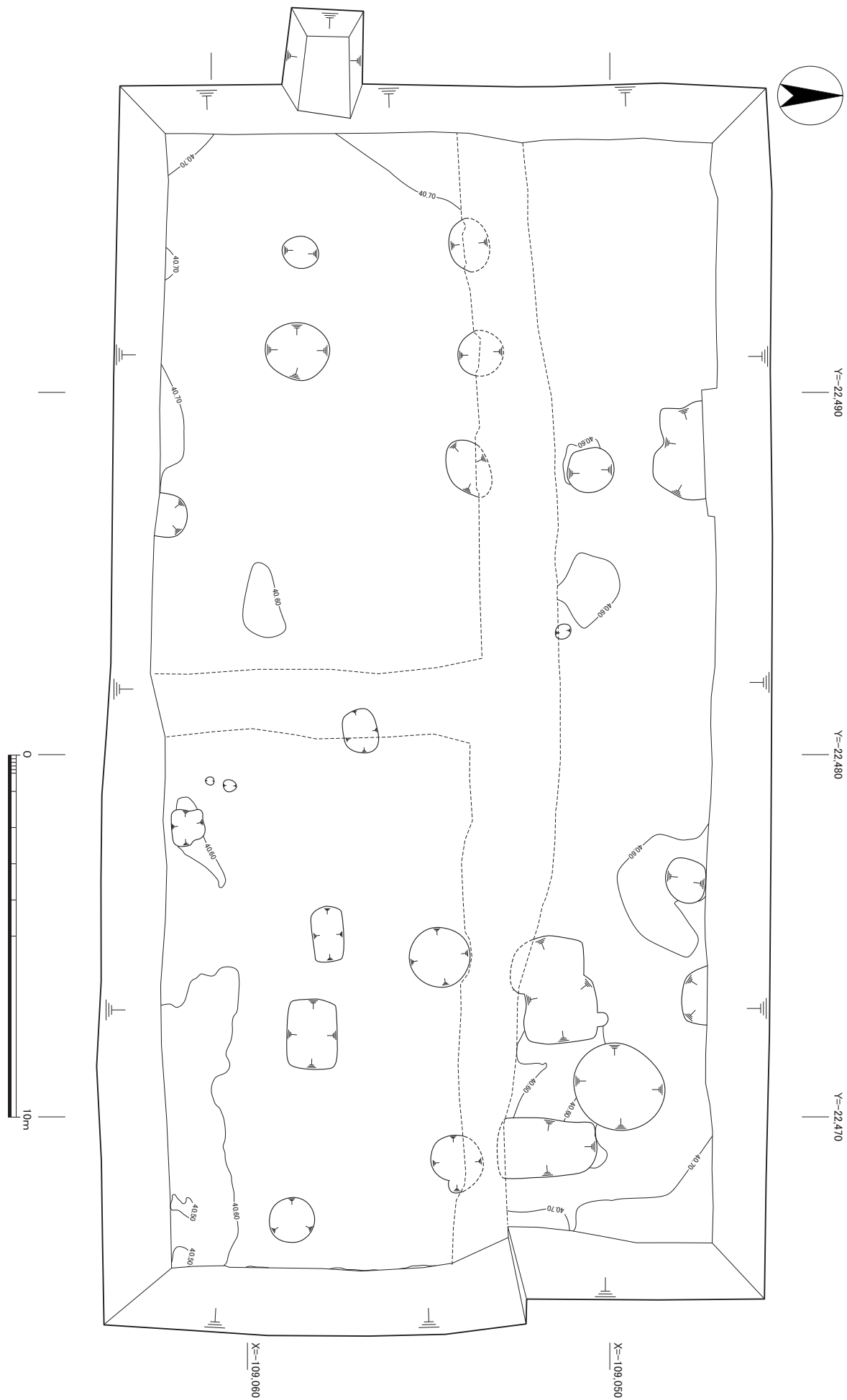
図 版



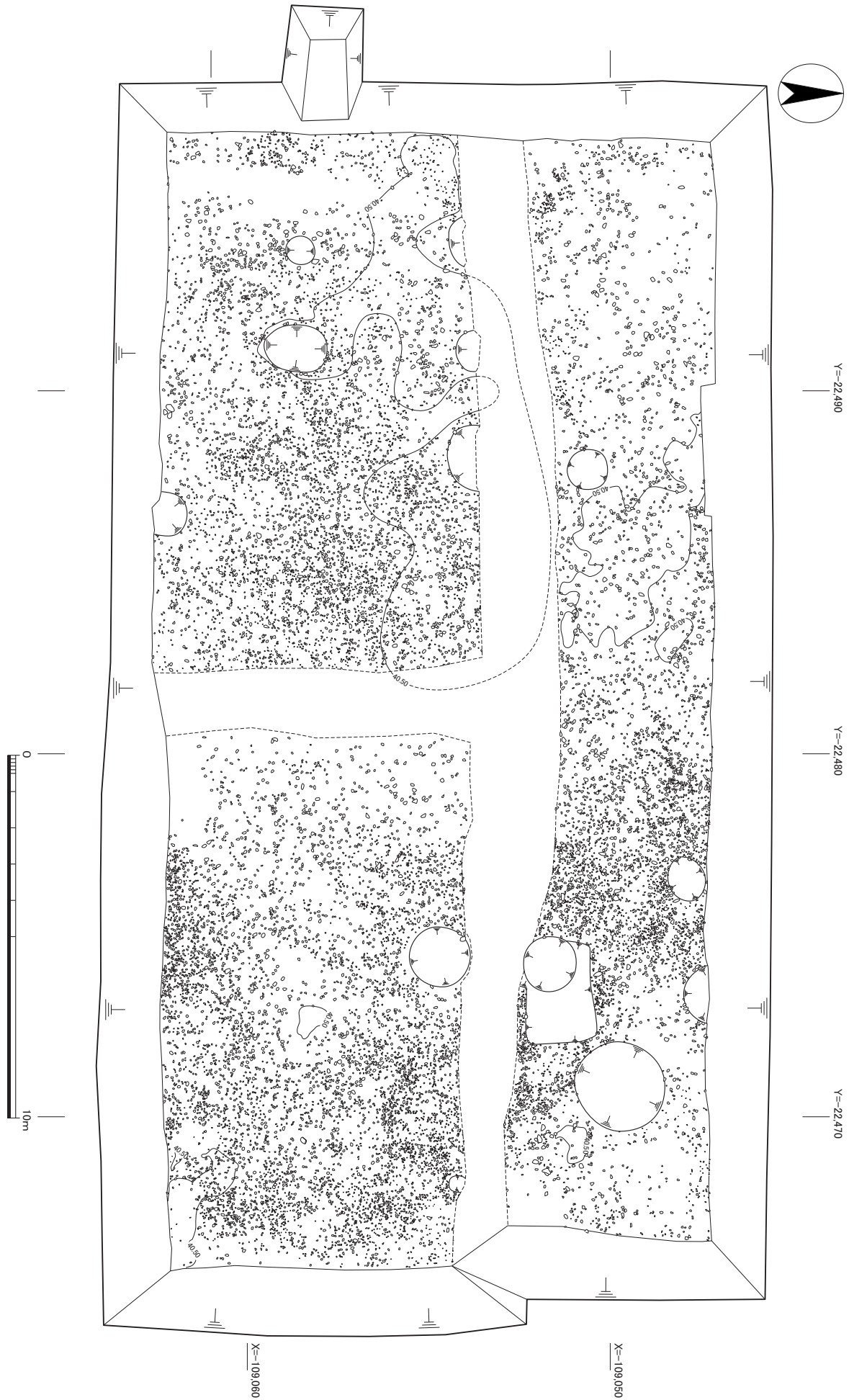
第1面 平面图 (1 : 150)



第2面 平面图 (1:150)



第3面 平面图 (1 : 150)



第4面 平面図 (1 : 150)



1. 1区第1面調査区全景（東から）



1. 1区第1面路面1検出状況（南から）



2. 1区第2面井戸0082検出状況（南東から）



1. 1区第2面調査区全景（東から）



1. 1区第3面調査区全景（東から）



1. 1区第4面（池底）調査区全景（東から）



1. 2区第1面調査区全景（東から）



2. 2区第1面土坑0231遺物出土状況（西から）



1. 2区第1面路面1検出状況（東から）



2. 2区第2面調査区全景（東から）



1. 2区第3面調査区全景（東から）



2. 2区第4面（池底）調査区全景（東から）



1. 3区第1面調査区全景（西から）



2. 3区第2面溝0383（東から）



1. 3区第2面調査区全景（西から）



2. 3区第3面調査区全景（西から）



1. 3区第4面（池底）調査区全景（西から）



1. 出土緑釉瓦



2. 柱穴0111出土軒瓦



1. 溝0383出土遺物



2. 溝0383出土猿面硯



3. 4層出土石包丁

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうにじょうにぼうじゅう・じゅうごちょう（かやのいん）あとはくつちょうさほうこくしよ							
書名	平安京左京二条二坊十・十五町（高陽院）跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	辻 純一 辰巳陽一 望月麻佑 野地ますみ							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2019年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうにじょうにぼうじゅう・じゅうごちょうあと五町跡、にじょうじょうきた二条城北遺跡、高やのいんあと陽院跡	きょうとしなかぎょうく京都市中京区あぶらこうじとおりまるたまち油小路通丸太町さがるだいもんじちょう下る大文字町50番	26100	1 238 248	35度1分 0.4秒	135度45分 12.7秒	2018年 7月2日 ～ 2018年 10月30日	594㎡	ホテル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京	都城	平安時代	園池	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦		・高陽院の園池を検出した。		
		鎌倉時代 ～ 室町時代	掘立柱建物、井戸、園池	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、瓦器		・鎌倉時代に高陽院を埋めた堆積土を確認した。		
		桃山時代 ～ 江戸時代	礫敷き路面	土師器、瓦、瓦器、陶器、磁器		・桃山時代～江戸時代に整備されたと考えられる礫敷き路面を検出した。		

平安京左京二条二坊十・十五町
(高陽院) 跡発掘調査報告書

発行日 2019年3月20日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961